泊桂木遺跡Ⅱ

福岡県前原市大字泊字桂木所在遺跡の第２次調査報告書

前原市埋蔵文化財調査報告書

第 98 集

2008

前原市教育委員会

泊桂木遺跡Ⅱ

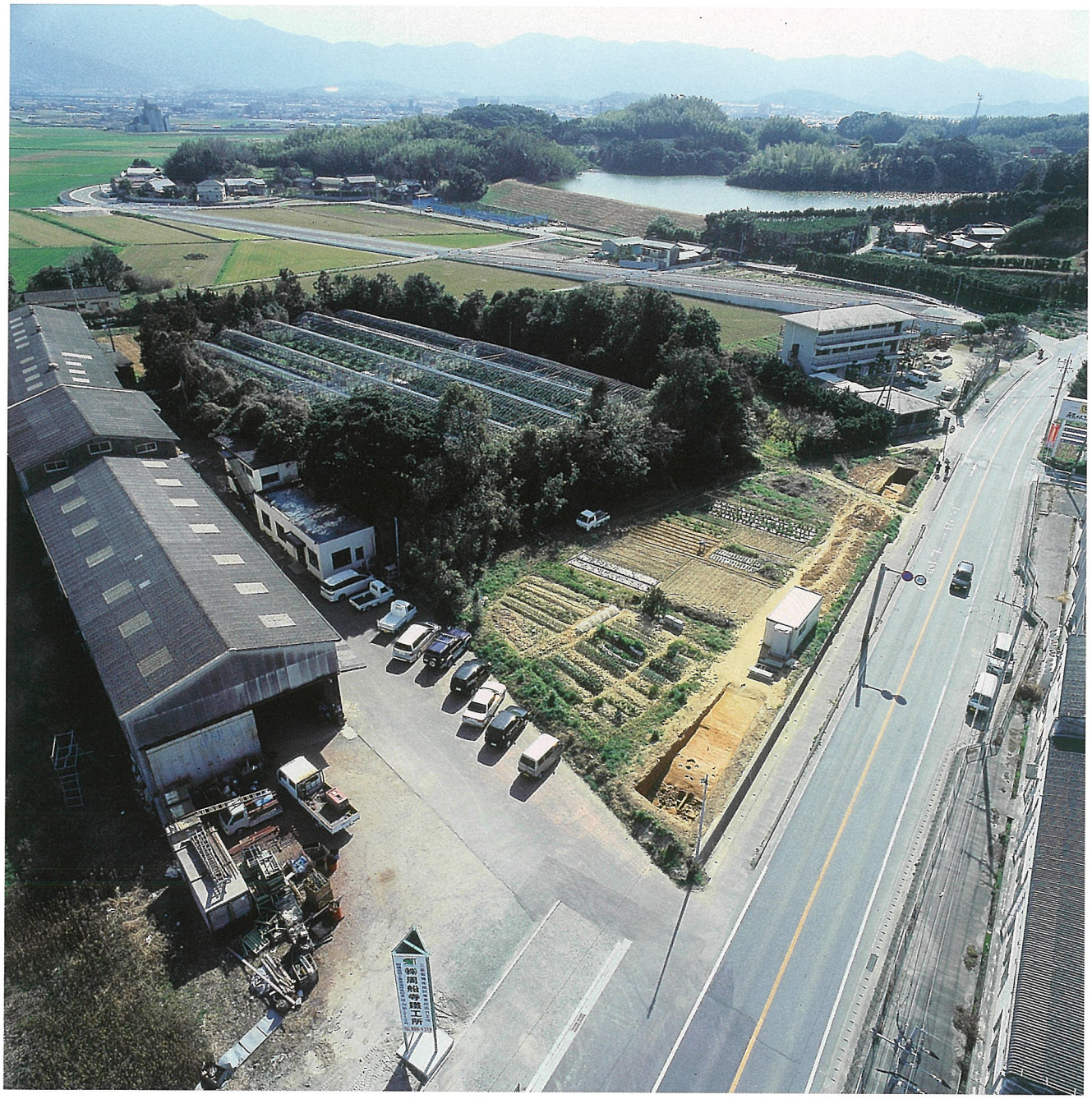
福岡県前原市大字泊字桂木所在遺跡の第２次調査報告書

前原市埋蔵文化財調査報告書

第 98 集

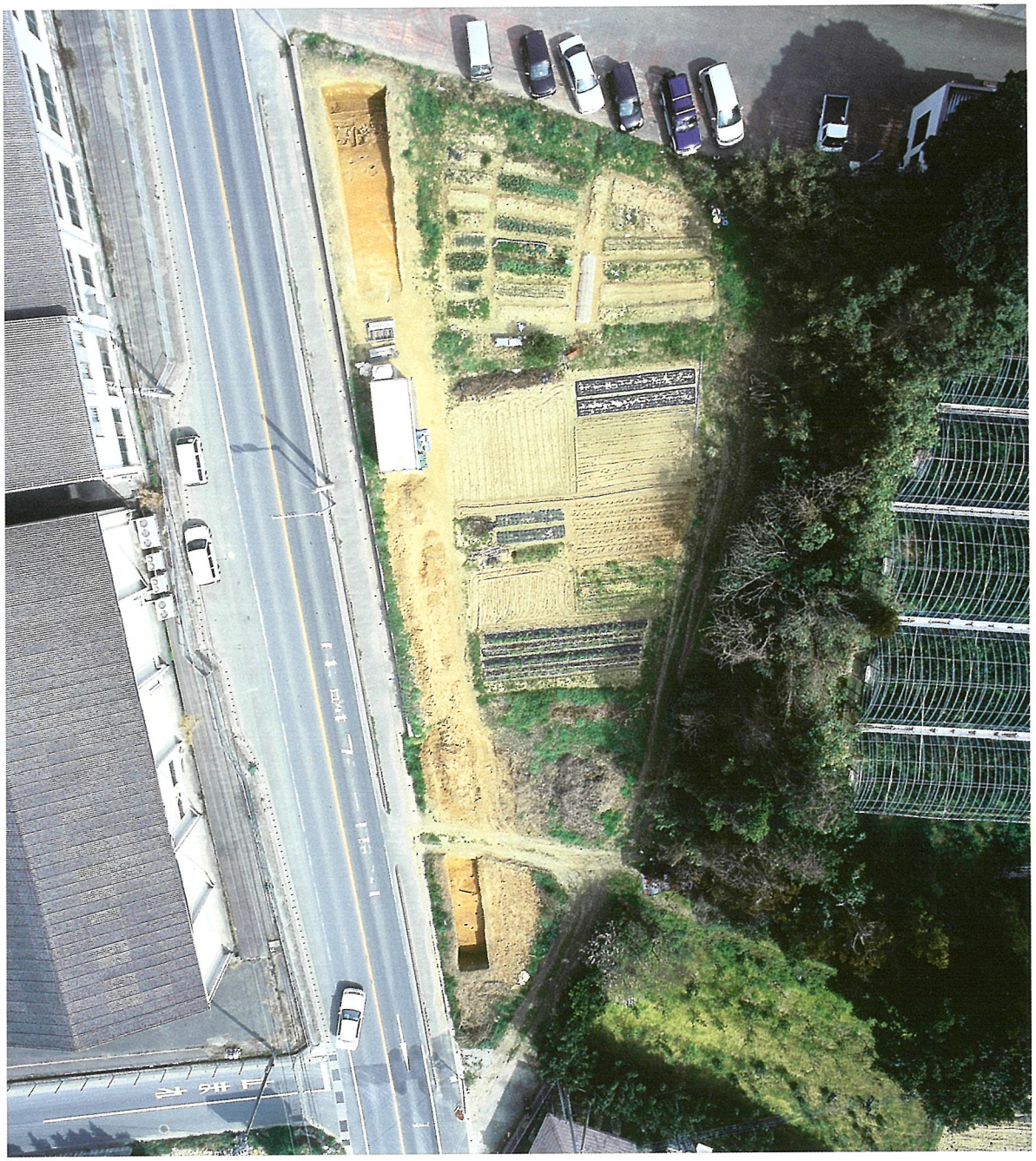
2008

前原市教育委員会



泊桂木遺跡　県道福岡志摩線と前原市をのぞむ。
（背後には泊大塚古墳、御道具山古墳がみえる。）

巻頭図版２



上空から遺跡全景

序

本書は、県道拡幅工事に先立って行なわれた埋蔵文化財発掘調査の報告書です。

現在、市内では都市化に伴い都市基盤整備事業や再開発に伴う各種の開発が実施されています。前原市教育委員会では開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財については事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。今回ここに報告いたします泊桂木遺跡の調査では過去に削平された地点を除き、土器溜まり、焼土坑や中世の土壙墓が検出され、貴重な成果をあげることができました。

最後になりましたが、福岡県前原土木事務所長　小林　彰様をはじめとする関係各位のご協力に対しまして感謝の意を表するとともに、本書が文化財理解の一助となり、広く活用されることを願っています。

平成20年３月31日

前原市教育委員会
教育長　　中　原　一　憲

例　言

1．本書は福岡県前原市大字泊字桂木にて県道拡幅工事に伴い実施した埋蔵文化財の調査報告書である。
2．発掘調査は前原市教育委員会が平成18年度に実施し、その結果を平成19年度に整理・検討し、報告書としてまとめた。
3．発掘調査で検出した各遺構について、土壙をSK、溝をSD、その他をPitとして記している。
4．現場における遺構、遺物の実測は中山健介、市丸千賀子の補助を受け、一部を瓜生秀文が、その他を福田博右が行なった。
5．現場における空中写真撮影は㈱九州航空に委託し、その他の撮影は瓜生、福田が行なった。
6．現場における発掘作業は中山健介、市丸千賀子、川上久美子、米山八重子が行なった。
7．遺物の実測、写真撮影は、福田が行なった。
8．遺物の整理、復元および製図は主に、友池真由美、末益真奈美、藤森啓子、和多治子、柏田睦子、三嶋弘美、有田麻里江が行なった。
10．本書に掲載した遺構図および全体図で使用した座標は国土座標系第２系を用いている。方位に関しては磁北で示している。
11．本書で報告した遺物、および図面、写真等の資料は一括して伊都国歴史博物館に保管する予定である。
12．本書の執筆、編集は江崎靖隆の協力をえて福田が行なった。

本　文　目　次

第１章　はじめに …… 1
　１．調査に至る経緯 …… 1
　２．調査の組織 …… 1
第２章　位置と環境 …… 2
第３章　調査の記録 …… 5
　１．Ⅰ区の調査 …… 5
　　(1)　概要 …… 5
　　(2)　主な遺構と出土遺物 …… 6
　　方形土坑（SK-01） …… 6
　　９号pit …… 6
　　(3)　Ｂトレンチ、包含層出土遺物 …… 7
　　Ｂトレンチ出土遺物 …… 8
　　包含層出土遺物 …… 8
　２．Ⅱ区の調査 …… 10
　　(1)　概要 …… 10
　　(2)　弥生・古墳時代の遺構と遺物 …… 11
　　土器溜まり …… 11
　　焼土坑 …… 20
　　SD-01（土器溜まり下溝状遺構） …… 22
　　包含層 …… 24
第４章　おわりに …… 26

挿　図　目　次

第１図　桂木749-2、750-1、754-2、755、756-1番地調査地点（1/800）…… 1
第２図　泊桂木遺跡の位置と周辺の遺跡分布図（1/75,000）…… 2
第３図　泊桂木地区と周辺の地形（1/5,000）…… 4
第４図　整地層遺構面全体実測図（1/60）…… 5
第５図　弥生時代遺構面全体実測図（1/60）…… 5
第６図　Ⅰ区北側壁土層断面実測図（1/60）…… 6
第７図　SK-01実測図（1/30）…… 6
第８図　Ⅰ区方形土坑（SK-01）・９号 pit 出土遺物実測図（1/3）…… 7
第９図　Ⅰ区Ｂトレンチ出土土器実測図（1/3）…… 7
第10図　Ⅰ区撹乱層・第７層・第３、５層出土遺物実測図（1/3）…… 8
第11図　Ⅰ区Ｂトレンチ出土石器実測図（1/2）…… 8
第12図　Ⅱ区全体平面実測図（1/80）…… 10
第13図　Ⅱ区北側壁土層断面実測図（1/60）…… 10
第14図　土器溜まり実測図（1/15）…… 13－14
第15図　土器溜まり出土遺物実測図１（1/3、●は1/4）…… 15
第16図　土器溜まり出土遺物実測図２（1/3）…… 16
第17図　土器溜まり出土遺物実測図３（1/3）…… 17
第18図　土器溜まり出土遺物実測図４（1/3）…… 19
第19図　土器溜まり出土石器実測図（1/2）…… 20
第20図　焼土坑実測図（1/30）…… 20
第21図　焼土坑・焼土壁出土遺物実測図（1/3）…… 21
第22図　焼土坑出土石器実測図（1/2）…… 22
第23図　焼土坑出土鉄滓実測図（1/2）…… 22
第24図　SD-01出土支脚実測図（1/3）…… 22
第25図　SD-01実測図（1/30）…… 23
第26図　SD-01出土石器実測図（1/2）…… 24
第27図　SD-01出土遺物実測図（1/3）…… 24
第28図　Ⅱ区第３層（包含層）出土石器実測図（1/2）…… 24
第29図　Ⅱ区第３、４、６層（包含層）出土遺物実測図（1/3）…… 25
第30図　Ⅱ区第３層（包含層）出土鉄滓１（1/2）…… 25
第31図　Ⅱ区第３層（包含層）出土鉄滓２（1/2）…… 25

図　版　目　次

巻頭図版１		泊桂木遺跡　県道福岡志摩線と前原市をのぞむ。
巻頭図版2		上空から遺跡全景
図版１	１－１	Ⅰ・Ⅱ区全景（真上から）
	１－２	Ⅰ区部分全体写真（真上から）
	１－３	Ⅱ区部分全体写真（真上から）
図版２	２－１	Ⅰ区北側壁土層断面状況（南東から）
	２－２	Ⅱ区北側壁土層断面状況（南西から）
図版３	３－１	Ⅰ区下層遺構面部分全体写真（西から）
	３－２	Ⅰ区中世遺構面部分全体写真（南西から）
	３－３	Ⅰ区方形土坑白磁出土状況近景（南西から）
図版４	４－１	Ⅱ区土器溜まり、焼土坑出土状況①（東から）
	４－２	Ⅱ区土器溜まり、焼土坑出土状況②（東から）
	４－３	Ⅱ区土器溜まり、焼土坑出土状況③（東から）
図版５	５－１	Ⅱ区焼土坑完掘状況近景（東から）
	５－２	Ⅱ区焼土坑土層断面状況（南東から）
図版６	８－１～10－９	Ⅰ区出土遺物①
図版７	10－10～15－20	Ⅰ区出土遺物②、Ⅱ区出土遺物①
図版８	15－21～16－41	Ⅱ区出土遺物②
図版９	16－42～17－61	Ⅱ区出土遺物③
図版10	17－62～18－81	Ⅱ区出土遺物④
図版11	18－82～24	Ⅱ区出土遺物⑤
図版12	27－１～31	Ⅱ区出土遺物⑥

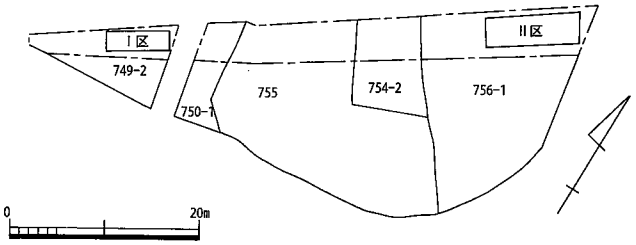
第１章　はじめに

１．調査にいたる経緯

福岡県前原土木事務所から前原市大字泊字桂木749-2、750-1、754-2、755、756-1番地における埋蔵文化財発掘の届出が提出されたのは平成18年10月４日のことである。開発目的は県道福岡志摩線の道路拡幅工事によるもので、申請地が96年度調査の泊桂木遺跡に隣接しており、遺跡包蔵地に含まれるとして、確認調査の必要を求めた。

確認調査では、まず中央部分から掘り下げたが、耕作土直下50cmほどで花崗岩質の地山を検出し、遺跡はないものと思われたが749-2地点で遺構を確認、土器片も出土した。756-1では試掘調査時には遺構は検出されなかったが、本調査では遺構が確認された。

この確認調査の結果を踏まえ、福岡県前原土木事務所と協議を重ねた結果、１月には調査委託に関して合意が得られたので、749-2地点をⅠ区、756-1地点をⅡ区とし、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。



第１図　桂木749-2、750-1、754-2、755、756-1番地調査地点（1/800）

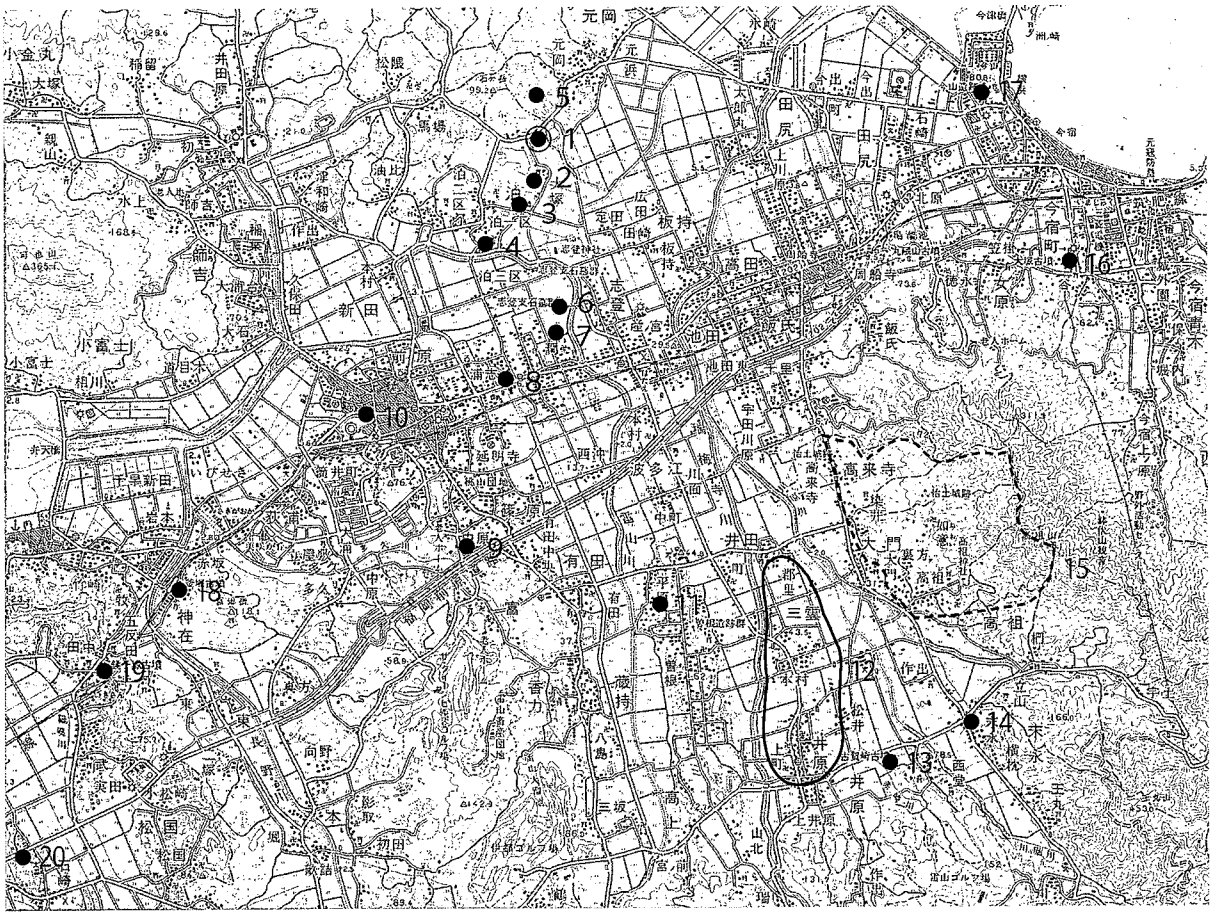
２．調査の組織

泊桂木遺跡調査にかかる平成18、19年度の調査組織は以下のとおりである。

調査主体	前原市教育委員会	
総括	教育長	菊竹利嗣（平成18年度）
		中原一憲（平成19年度）
	教育部長	三島俊蔵（～平成18年９月）
		坂巻善直（平成18年10月～）
	文化課長	鬼木武信（～平成18年12月）
		久保静代（平成19年１月～）
	文化財係長	角　浩行　（平成19年度より発掘調査係）
調査	文化財係主査	瓜生秀文
	文化財係主事	江崎靖隆　楢崎直子
	臨時職員	福田博右

第２章　位置と環境

泊地区は前原市の北端に位置し小高い山や谷部が多く、泊大塚古墳や御道具山古墳が存在する。また、遺跡の南東には標高６ｍ以下の帯状低地帯の水田が広がっているが、ここは元和四年（1618）の黒田検地の干拓事業によって旧今津湾はほとんどが埋め立てられたことからほぼ今の地形になったと考えられる。このあたりが「泊」と呼ばれる由来は、筑前国続風土記の巻之二十三に「…昔の入海よりむかひに、泊村あり。是むかしの海の入江にて、船の泊りし所にして、唐船をも、ここにつなげりと云。…」と記されていることから、中国や朝鮮行の船が停泊する場所だったためではないかと伝えられている。また、かつては西の加布里湾と東の今津湾はつながっており、糸島水道と呼ばれる海峡であったと考えられていた。それは寛仁３年（1019）刀伊の入寇で糸島水道を通り抜けながら両岸の村を襲ったとの記録に残っていることに由来する。しかしこのことは、



１．泊桂木遺跡　２．泊大塚古墳　３．御道具山古墳　４．泊熊野遺跡　５．元岡桑原遺跡
６．志登支石墓群　７．潤地頭給遺跡　８．浦志遺跡　９．上鑵子遺跡　10．前原西遺跡
11．平原遺跡　12．三雲・井原遺跡群　13．西堂古賀崎古墳　14．末永数蔵町遺跡
15．怡土城址　16．今宿五郎江遺跡　17．今山遺跡　18．釜塚古墳　19．一貴山銚子塚古墳
20．曲り田遺跡

第２図　泊桂木遺跡の位置と周辺の遺跡分布図（1/75,000）

下山正一氏らによる貝化石層の分布調査、地質構造の調査で泊～志登間は貝化石層の分布が途切れていることが判明し、水道は否定的な見解が導かれている。また、貝化石層の分布している地域には弥生～古墳時代の遺跡が発見されず、この調査結果と合致し、志登支石墓付近の一部は陸続きであった可能性が強い。

周辺遺跡を概観すると、古いものでは縄文時代後期の桑原飛櫛貝塚、元岡瓜尾貝塚がある。桑原飛櫛貝塚からは厚さ80㎝の貝層が発見され牙製品、貝輪などや６体分の土壙墓が発見された。

弥生時代になると、早期～中期の志登支石墓群（６）がある。支石墓10基、甕棺墓８基からなっているが、支石墓から出土品が出ることはごく稀だが、志登からは多数の柳葉形磨製石鏃が出土しており国史跡に指定されている。また、この時期の遺跡として今山遺跡（17）があり、弥生前期末に良質な玄武岩を使って製作した石斧は北部九州全域に流通する。弥生時代中期～終末にかけての遺跡は、大量の水銀朱が副葬されていた甕棺墓が出土した泊熊野遺跡（４）、終末期の大規模な玉造り工房跡や準構造船が見つかった潤地頭給遺跡（７）、掘立柱建物跡が検出された第１次調査の泊桂木遺跡（１）、そして現在九州大学伊都キャンパスの建設予定地の一部である元岡桑原遺跡（５）がある。そこは旧地形では谷になっており、中央を流れる川の両端からは大量に捨てられた土器溜まりが出土している。中でも小銅鐸、小型仿製鏡、貸泉などの青銅製品や、弥生時代後期後半頃の船の隔壁、木製琴、ワイングラス型漆器が出土している。丘陵地にある泊桂木遺跡と谷部の元岡桑原遺跡はちょうど前原と福岡の市境にあって別の遺跡に思われそうだが、出土品や遺構の時期から同一集落ではないかと考えられる。

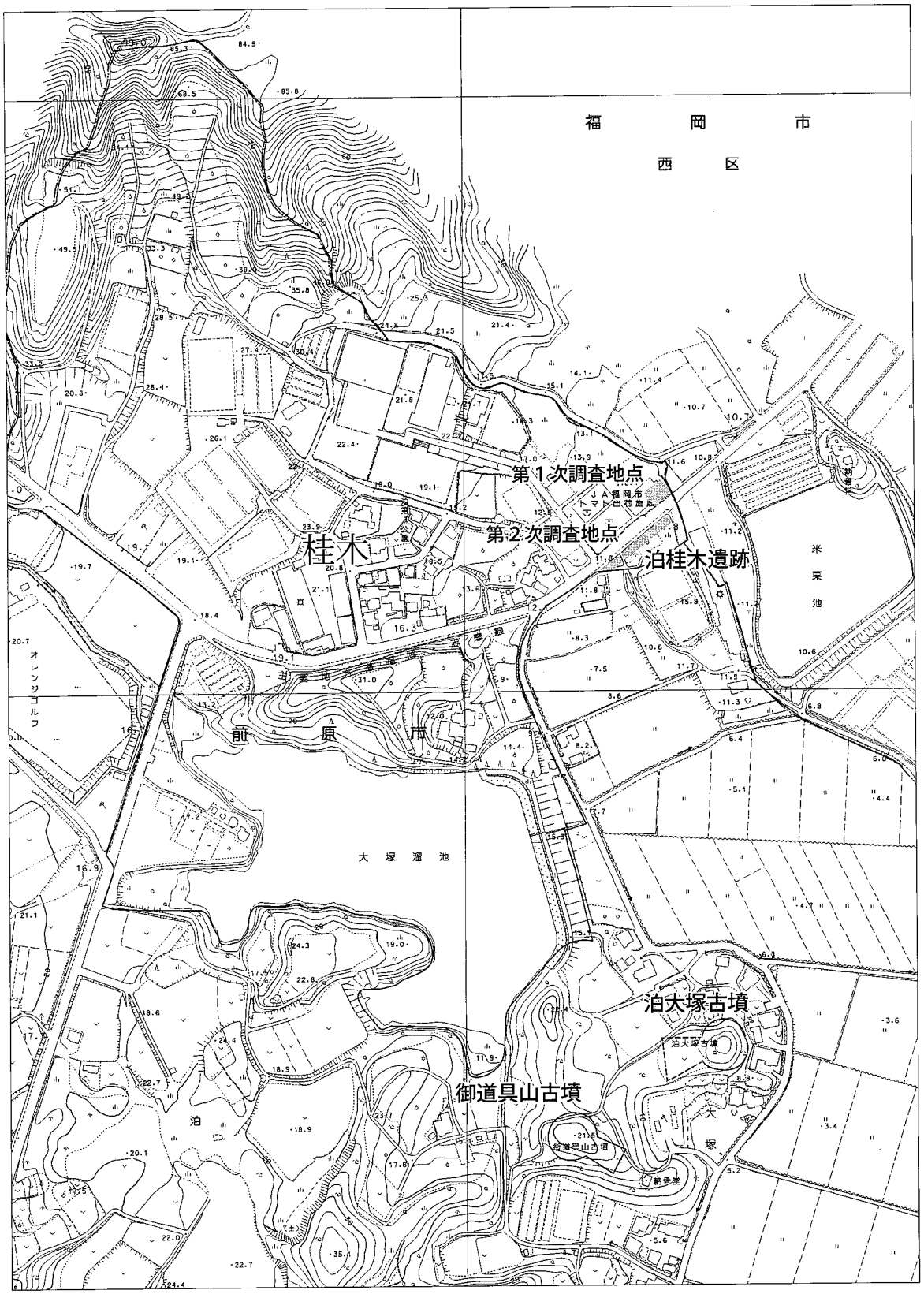
古墳時代に入ると、北部九州最大級の泊大塚古墳（２）、御道具山古墳（３）が現れる。前者は推定で全長約75m、後円部径約45m、高さ約８mあり、後者は全長65m、後円部径約40m、高さ4.5mあり、４世紀後半頃の首長墓である。そこより西側には小型の箱式石棺墓を主体とし、刀剣、鉄鏃、画像鏡が出土した前方後円墳の権現古墳がある。泊桂木の北部に位置する元岡古墳群は、前方後円墳６基を含む数十基から構成され、４世紀中頃から６世紀の終わりまで継続して首長の系譜を辿る事のできる重要な古墳群である。その中の金屎古墳からは床面にベンガラ、頭部に朱の赤色顔料が撒かれた割竹型木棺が出土し、仿製鏡２面が発見された。

７世紀になると、志摩半島の丘陵地帯でさかんに製鉄が始まり、八熊製鉄遺跡に代表される製鉄炉をもつ遺跡が多くなってくる。元岡桑原遺跡でも７世紀頃の製鉄炉が発見されている。

このようにこの近辺だけでも古代から多くの出土品や歴史が残っており、生産・交流が盛んであったことがわかる。今回の調査が糸島半島を中心に栄え、衰退していった伊都国の姿を少しでも解明できると幸いである。

【参考文献】

・岡部裕俊編　『泊桂木遺跡』前原市文化財調査報告書　第64集　1997年
・江崎靖隆編　『潤地頭給遺跡Ⅱ』前原市文化財調査報告書　第96集　2007年
・糸島新聞社　『伊都国遺跡ガイドブック』　2001年
・由比章祐　　『怡土志摩地理全誌』志摩篇　「筑前國續風土記　巻之二十三」より　1990年
・福岡市教育委員会　『桑原遺跡群Ⅱ』福岡市文化財調査報告書　第480集　1996年



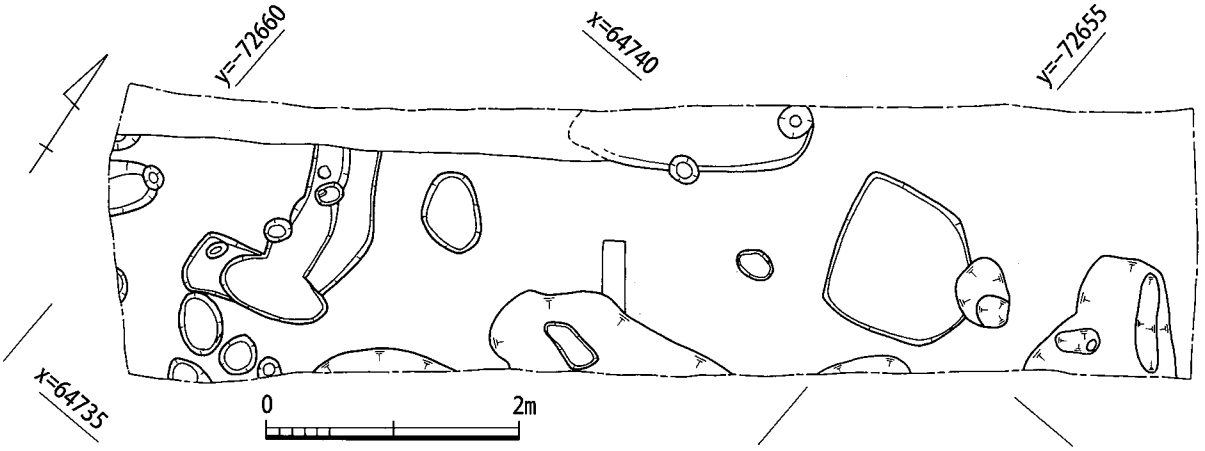
第３図　泊桂木地区と周辺の地形（1/5, 000）

第３章　調査の記録

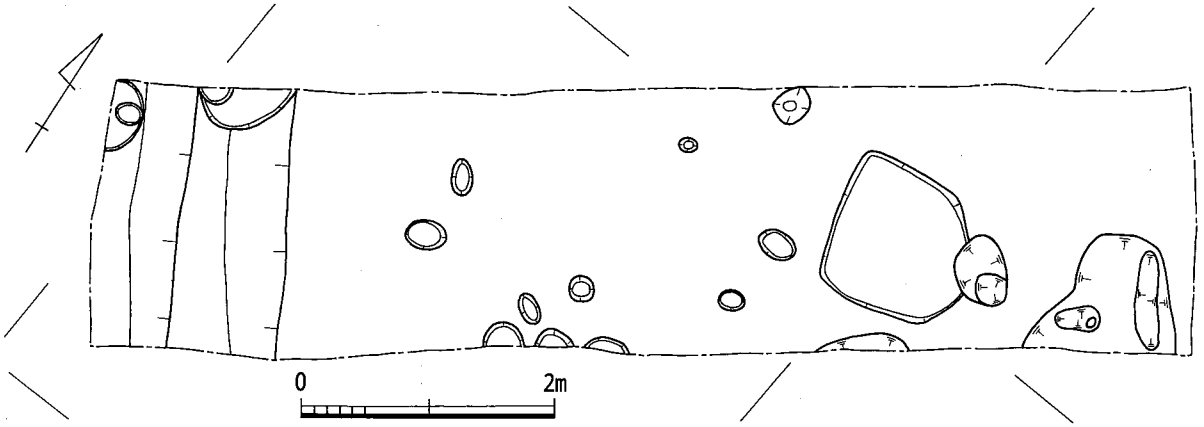
１．Ｉ区の調査

(1)　概要

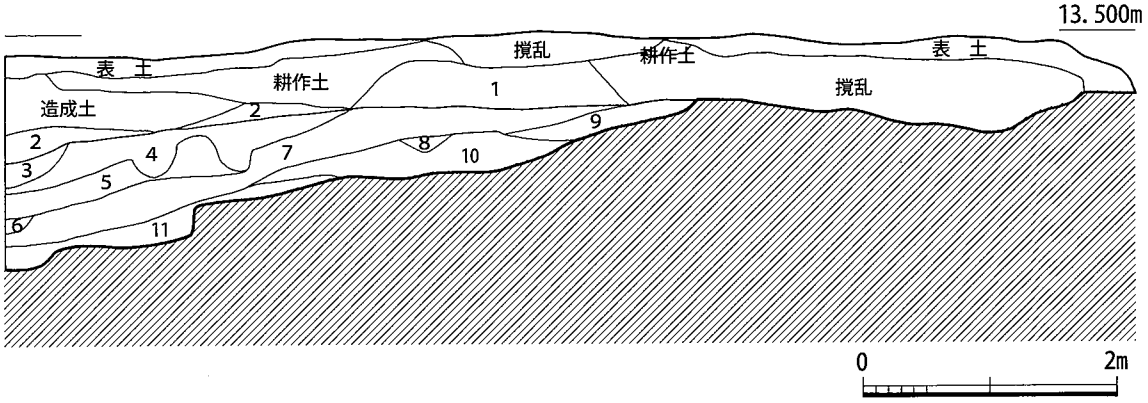
Ｉ区は、試掘調査時に表土下約50cmでpit遺構を確認できた地点で、地理的にも丘陵の落ちになっており幸いにも遺跡が残されていた。当初中世段階で整地された面で調査をしていたが、全てを完掘後にトレンチを入れるとさらに遺構面があることがわかった。しかし、多数のpitを確認することができながら、遺構の特定ができなかったのは調査区の幅が２ｍと狭く、かなり古い時期から耕作などで幾重にも攪乱を受け、はっきりとわからなかったことが残念であるが、中世の方形土坑、焼土を含むpit遺構（９号pit）を検出し、主に中世段階での遺構が確認された。



第４図　整地層遺構面全体実測図（1/60）



第５図　弥生時代遺構面全体実測図（1/60）



第６図　Ⅰ区北側壁土層断面実測図（1/60）

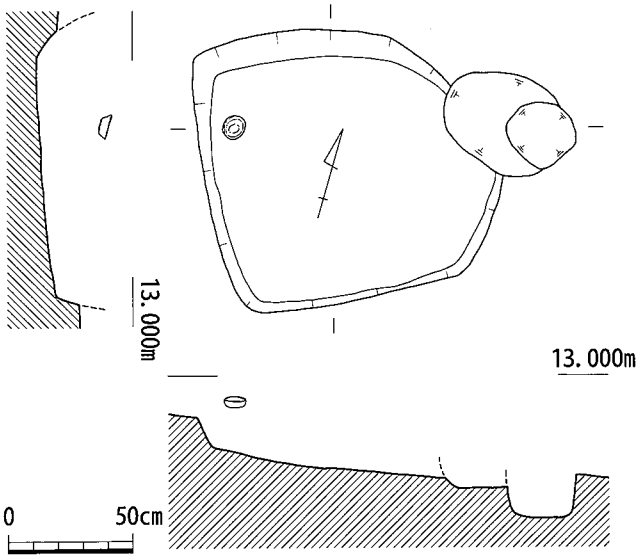
1．暗茶褐色粘質土（造成土）　2．淡茶色粘質土　3．淡橙灰色粘質土（白磁等土器含む）
4．明橙褐色砂質土（少土器含む）　5．橙灰色粘質土（土器を含む）
6．橙灰褐色粘質土（Pit 遺構）　7．暗灰色粘質土（中世遺構面）
8．明茶褐色粘質土（Pit 遺構、少土器含む）　9．黒灰色粘質土（土器・炭を多く含む）
10．濃茶灰色粘質土（包含層）　11．弥生土器層

(2)　主な遺構と出土遺物

方形土坑（SK-01：第７・８図）

Ⅰ区東側は耕地整備の為に削平され、表土直下に花崗岩質の地山を検出した為、SK-01は当初撹乱だと思われた。

方形型の土坑墓は中世段階で多く見られる埋葬形式でSK-01はその形式をとっており、底から約23cm 上に２枚の白磁皿が重なった状態で出土し、その特徴と一致する。頭位は白磁皿の位置から北西と考えられる。



第７図　SK-01実測図（1/30）

９号 pit（第８図）

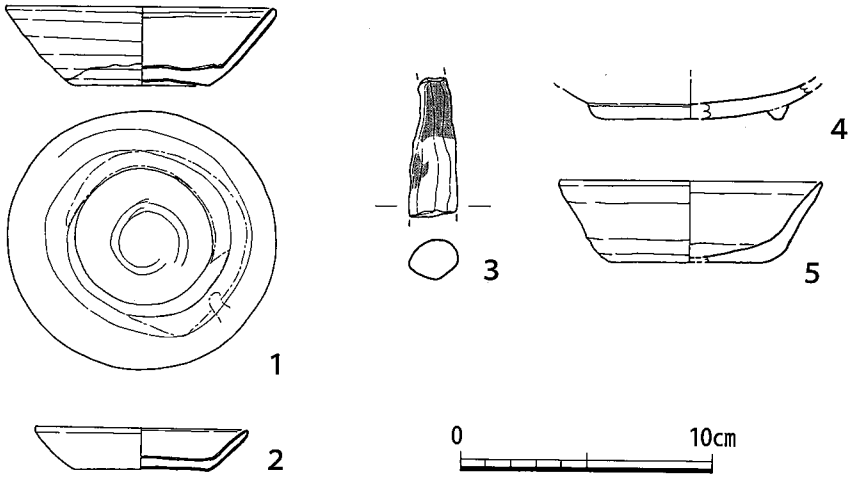
９号 pit からは中世の焼土を検出した。また、遺構内からは被熱した土器が出土している。

出土遺物（第８図）

碗（１）１はSK-01出土の完形の白磁碗で、内・外面共に回転ヘラケズリが施されており、口縁部、胴下半部には釉が施されていない。底部にはヘラ記号が刻まれる。

皿（２、５）２はSK-01出土で１よりもやや浅く内・外面とも回転ナデによって整形されている白磁皿である。口縁部以外はすべて施釉されており、底部もヘラ切り後、ヘラナデされている。完形品。５は撹乱２からの出土で、全体をナデ成形された土師皿である。約1/2を残存する。

不明土製品（３）３は９号 pit から出土した不明土製品で、淡白黄色で手づくね成形されてお

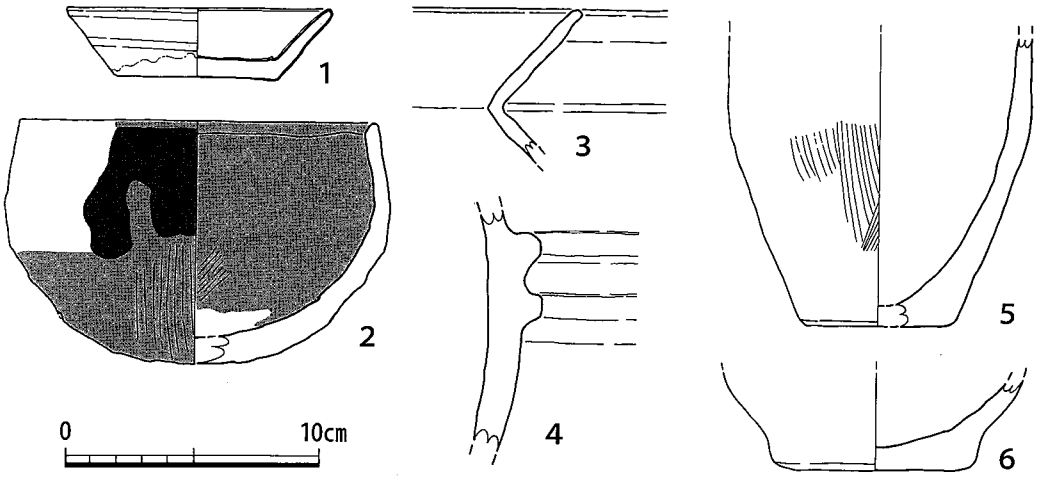


第８図　Ⅰ区方形土坑（SK-01）・９号 pit 出土遺物実測図（1/3）

り、ススが付着する。重量は16.99g。

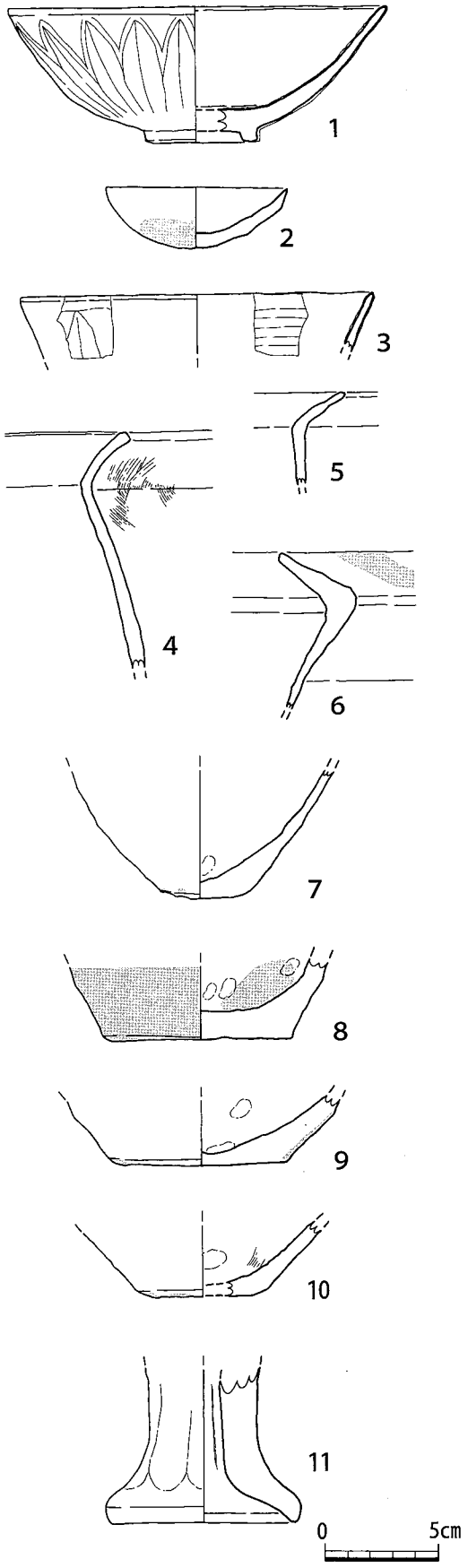
台付碗（４）４は９号 pit 出土、内面は調整不明瞭だが、外面は回転ナデによって碗部を成形し、台部をナデツケされている。底部のみ1/3残存。

(3)　Ｂトレンチ、包含層出土遺物

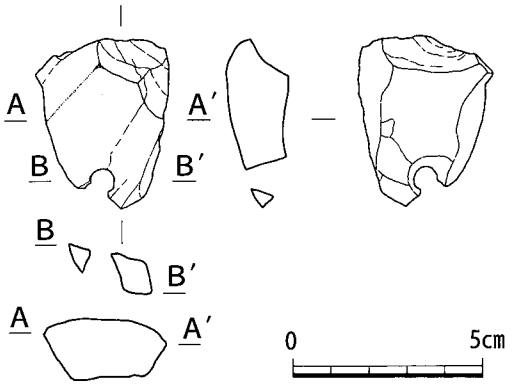


第９図　Ⅰ区Ｂトレンチ出土土器実測図（1/3）

Ｂトレンチは、調査中に遺構面と地山が一致しないため確認の為に入れたトレンチである。深さは弥生時代の遺構面まで下げ、深いところで約85cm を有する。また、中世の遺構面下には数層に分かれた包含層があり、さらに多数の弥生後期以降の土器を含んでいたが、いずれも激しい摩滅、表面風化で完形のものはほぼ皆無であった。



第10図　Ⅰ区撹乱層・第7層（整地層）・第3，5層（包含層）出土遺物実測図（1/3）



第11図　Ⅰ区Bトレンチ（第5層）出土石器実測図（1/2）

Bトレンチ出土遺物（第9・11図）

不明石製品　第11図は長さ4.5cm、巾3.5cm、厚さ1.6cmの第5層から出土した石器である。穿孔がされているが破片しか残っていない為用途は不明である。

皿（1）1は1-C類に属する白磁碗である。1230年代から1300年代までに量産されたもので胎土は精良、外面底部にも施釉されており、非常に作りがよい。

碗（2）2は内外面共に強い熱を受け、内面はススが付着する。手づくねによって成形され、ハケメ・ナデ・オサエの調整が施される。

壷（3）3は4C後半と考えられる土師器の壷で、胎土は粗く、摩滅により調整不明瞭。第5層出土。

甕（4～6）4は大型の甕で外面に二条の突帯が巡るが、内外共に風化が激しい。第5層出土。5は小型の甕で、表面の風化が進んでいるものの外面にハケメが残る。第3層出土。6は第3層から出土の甕で、内面にナデ、オサエが残る。底部2/3残存。

包含層出土遺物（第10図）

碗（1、3）1はG・Ⅳ類に属する龍泉窯系青磁碗で、14C初頭～15C前半に生産されたものである。内外面に施釉されているが、底部（台部を含む）は釉が塗られていない。外面にはケズリ出

しの蓮弁文があるが内面は無文である。撹乱層より出土した。３は第５層から出土した龍泉窯系青磁碗。口縁部の破片しか残存していないが、蓮弁文がはっきりと残る。

皿（２）は手づくね成形された土師皿で、底部には黒斑が付着する。つくりは粗雑であるが完形品である。第７層より出土。

壷（６）６は第３層出土の二重口縁壷で、表面風化により調整不明瞭だが、外面に一次焼成痕（ススス）が付着する。

甕（４、５、８、９）４は胴部がなで肩の甕で頸部にハケメを残す。上半部1/9残存で内面剥離や表面が摩滅している。第３層出土。５は胴部がほぼ垂直に落ちる甕で口縁部1/10しか残存していない。調整不明瞭。第３層出土。８は第３層出土の甕で、外面に強度の被熱痕、内面に黒斑が残る。内面はユビオサエ後、ナデで成形されるが外面は摩滅と剥離で調整は不明。第３層出土。９は底部からの立ち上がりが緩やかな甕で、外面にスス、被熱痕が残る。内面は指頭痕があり、ユビオサエ後、ナデ成形されたのがわかる。外面はタテハケ、ナデオサエが施される。第３層出土。

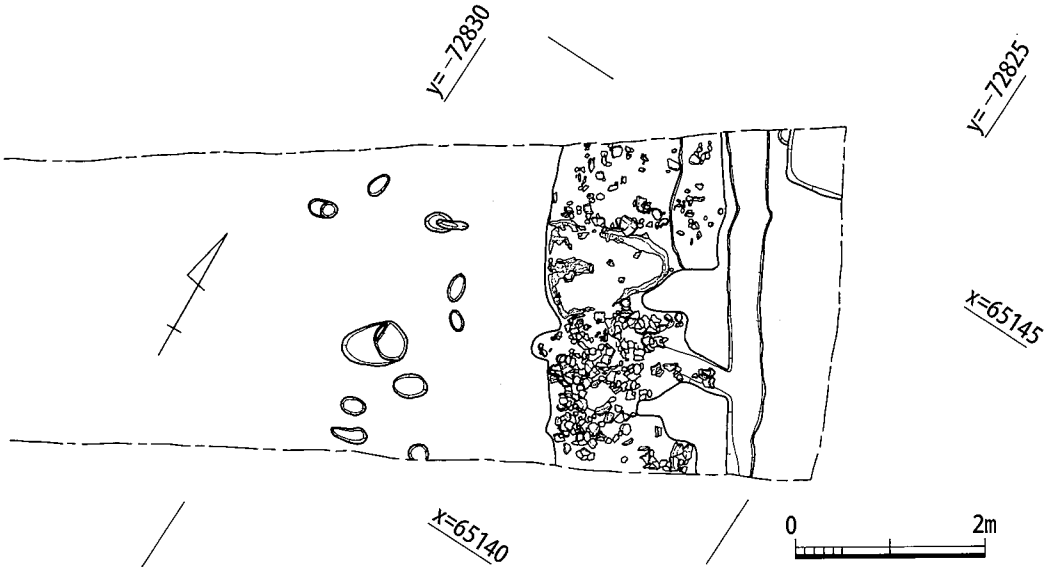
鉢（７、10）７は底部がやや丸みを帯びた鉢で、外面にスス、被熱痕が残る。内面は指頭痕がありオサエによって調整される。内面明赤橙色、外面暗赤橙色。第３層出土。10は底部が円状に欠損している鉢で、内面は指頭痕が残り、オサエ後ハケメ、ナデによって調整される。底部にはススが付着する。第３層出土。

器台（11）11は底部が1/2残存する器台で、内面ナデ・シボリ・ツマミ、外面ナデ・ナデオサエによって調整される。第３層出土。

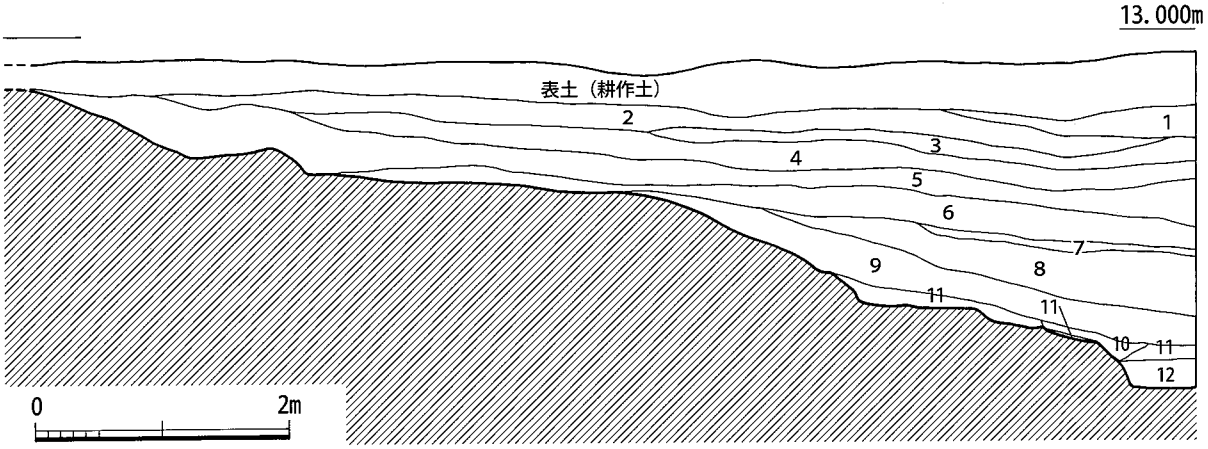
2．Ⅱ区の調査

(1) 概要

Ⅱ区は試掘時には遺構を検出することができなかったが、摩滅が激しい土器が多数出土した。本調査では、弥生後期から中世までの土器片を多量に含む包含層が幾重にも層を成していたが、最深部で2.4mと深いところで地山を検出し、幸いにも耕作地整備時に丘陵の削平の影響を受けずに残存していた。主な遺構は土器溜まり、焼土坑、SD-01である。



第12図　Ⅱ区全体平面実測図（1/80）



第13図　Ⅱ区北側壁土層断面実測図（1/60）

1．暗茶色粘質土（造成土層）　2．明黄茶色粘質土（造成土層）　3．黄茶色粘質土（造成土層）
4．明茶褐色粘質土（造成土層）　5．暗茶褐色粘質土（流下土層、土器包含層）
6．明茶褐色粘質土（流下土層、土器包含層）　7．黄灰色砂質土（流下土層、土器包含層）
8．暗赤褐粘質土（流下土層、土器包含層）　9．暗灰褐色粘質土（流下土層、土器包含層）
10．明灰褐色砂質土　11．黒褐色粘質土（土器溜まり）
12．淡黄灰色砂質土（土器を多く含む）

(2) 弥生・古墳時代の遺構と遺物

土器溜まり

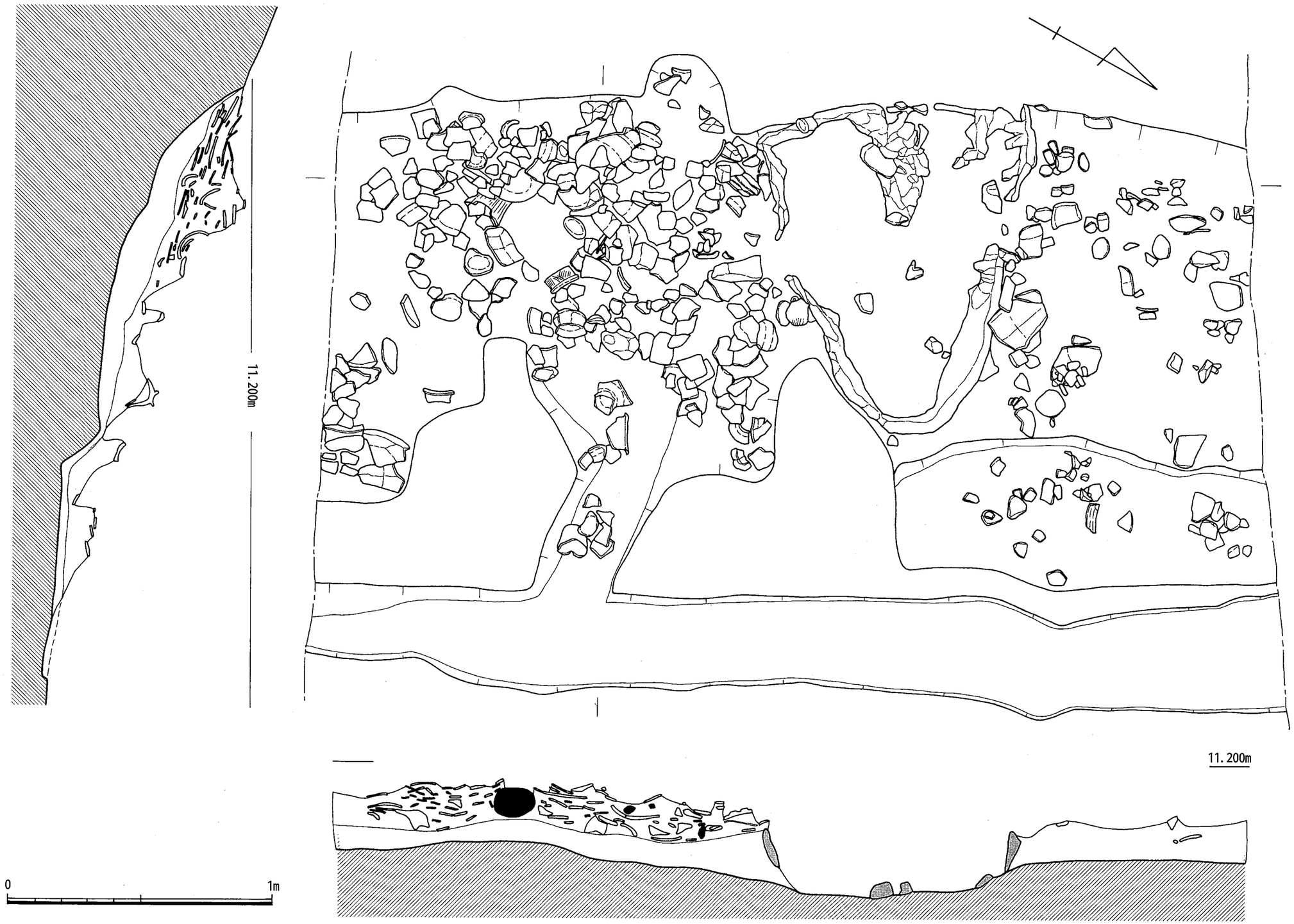
Ⅱ区の西から東へ落ちる丘陵部の裾で検出した土器溜まりは東西に幅約1.9mあり、今回の調査範囲ではその範囲を確認できなかったが南北にも続きがあることから、土器溜まりは丘陵東側裾に広がって残存している可能性がある。主な時期は弥生中期頃から古墳前期までを中心とし、甕・壷・鉢・碗・皿・器台・蓋と多種多様な機種が出土した。

土器溜まり出土遺物（第15～19図）

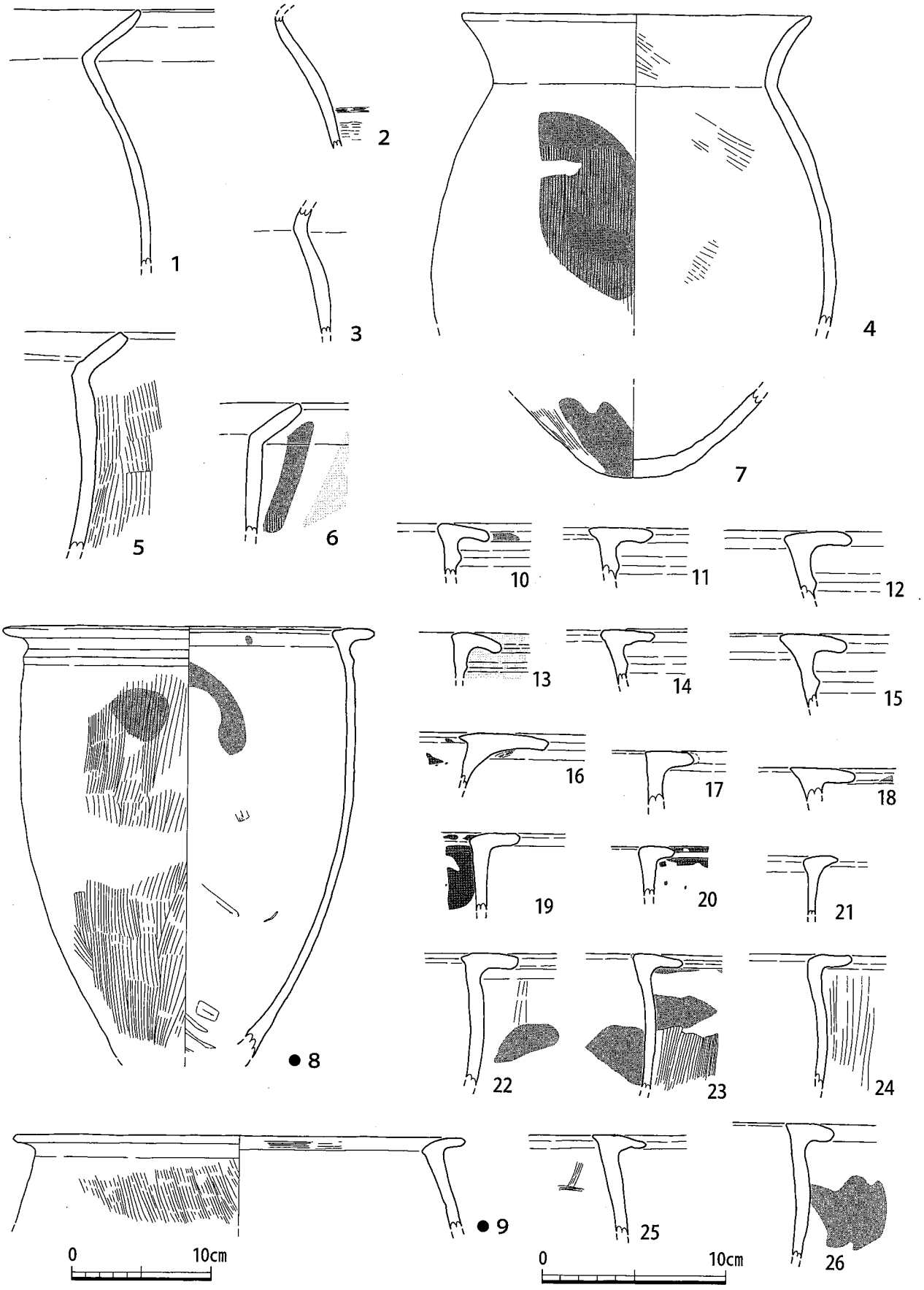
甕（１～６、８～15、17～29、31～40、42～44、80～82、84）１は４Ｃ前半頃の布留式の甕で、表面風化が著しく調整は不明である。内面暗灰黄色、外面灰黄色で胎土は細砂粒。２は胴部がなで肩の布留式甕で、残存状況は胴部の一部しかなく表面風化で残りが悪い。外面胴部には横方向の棒状工具痕とヨコハケが残る。３は内外面共に橙褐色の土師器の甕で、表面風化が激しい。４は弥生後期後葉の甕で、胴部にススが残る。内面ナナメハケ、外面ヨコナデ・タテハケで調整される。口縁～胴部1/8残存。５は内面明褐色、外面濁茶褐色の甕で、内面ヨコナデと棒状工具痕、外面口縁部ヨコナデ、胴部タテハケで調整される。６は弥生後期後葉の甕で、外面はナデ・ハケメで調整され一次焼成痕、スス痕が残り被熱を受けるが内面は摩滅により調整不明である。口縁部1/8残存。８は弥生中期中葉の口径26.6cmの甕で、内外面にススが付着する。鋤先口縁の下部には一条突帯文が巡る。９は鋤先口縁がやや立ち上がる甕で、口縁上部はヨコハケ、外面胴部はタテハケで調整される。10は口縁がやや垂れる弥生中期後葉の甕で、口縁先端にススが付着する。胴部には一条突帯文が巡る。11は摩滅が著しい弥生中期後葉の甕で、内外ともナデ調整され、外面に一条突帯文が巡る。口縁部1/9残存。12は弥生中期中葉の甕で、内面頸部付近に棒状工具痕が残り、外面胴部に一条突帯文が巡る。口縁上部にはススが付着する。13は外面から口縁上部にかけて一次焼成痕が残る弥生中期中葉の甕で、内外共にナデで調整される。胴部には一条突帯文が巡る。14は弥生中期後葉の甕で、焼成がやや不良で軟質である。部分的に剥離が見られる。胴部に一条突帯文が巡る。15は胎土が粗く1～3mmの石英を多く含む甕で、内面はナデによる調整が残るが外面は摩滅しており調整不明である。胴部に一条突帯文が巡る。17は弥生中期前葉の甕でナデ成形される。焼成は良好で内面淡灰褐色、外面暗灰褐色。18は弥生中期後葉の甕で、外面にススが付着する。焼成があまく、やや不良。ナデ成形される。19は弥生中期中葉の甕で、丹塗磨研されている。ナデ調整されるが外面は風化している為丹は残っていない。20は中期後葉の外面に丹塗りが施された甕で、胎土は細砂粒。口縁部1/8残存し、復元径は13cmを有する。21は摩滅が著しい弥生中期中葉の甕で、表面風化しており、内外とも淡黄橙色。22は弥生中期後葉の甕で、口縁部1/5残存する。外面には工具痕があり、ススが付着する。23は弥生中期後葉の甕で、外面胴部にタテハケが残る。内外にススが付着するが、内面は薄く、外面は強い。24は焼成が良好な甕で、外面にタテハケを残す。内面は風化の為調整不明瞭。25は中期後葉の甕で、内面に棒状工具痕を有する。頸部は強いヨコナデがされてあり、胎土がやや粗く、焼成はやや良。26は弥生中期後葉の甕で、外面にススが付着する。内外ともナデ成形される。27は弥生中期後葉の甕で、口縁先端にススが付着する。焼成はやや良で内面橙褐色、外面黄橙色、復元口径は32cm。28は弥生中期前葉の甕で、内面は風化しているが、外面はヨコナデが残る。内面茶褐色、外面淡茶褐色。29は弥生中期後葉の甕で、内面は摩滅により調整は

不明だが、横方向に棒状工具痕が残る。外面はナデで調整されている。胎土は粗く、１mm程度の石英・白色長石を多く含む。口縁部1/5残存。31は大型の甕で、弥生前期後半～後期初頭と考えられる。復元口径は50.4cmで、残高は7.5cm。胎土が粗く、１～２mm程度白色長石・石英を多く含む。外面に約３cmのM字突帯文を有し、棒状工具痕、スス痕が残る。32は底部1/2を残存し、淡黄褐色の甕である。焼成があまくやや不良で、表面剥離が著しい。33は弥生中期後葉の甕で、内面・底部をナデ、外面をタテハケで調整される。34は浅い角度で立ち上がる甕で、内面をナデ・ユビオサエで調整し、外面は摩滅により不明である。35は内面灰橙褐色、外面暗橙褐色の甕で、底部を1/4残存する。焼成があまくやや不良、また、胎土も粗く１mm程度の石英を多く含む。36はつくりが荒く、形が歪な甕で、底部～胴部にかけて約1/3残存する甕である。内面底部に指頭痕があり、ナデ・ユビオサエで調整される。外面はタテハケが残るが底部付近は表面風化が進んでいる。37の甕は比較的良好な状態で残っており、内面をヘラナデ・ナデ、外面をタテハケ・ナデで調整し、底部が1/3残存する。38は底部に外→内の焼成後穿孔が施された甕で、内面ナデ、外面胴部をタテハケ、底部をナデで調整される。穿孔部の復元径は1.9cmとなる。39の甕は表面風化が著しく、内面のナデ調整だけかろうじて確認できる。底部が1/4残存し、焼成は良好である。40は底部が1/4残存する甕で、焼成はやや不良。表面風化が激しく、調整不明瞭である。42は底部に長１cm×幅1.3cm×深さ0.4cmの円孔を持つ甕で、内面はヘラナデ・ユビオサエ、外面はナデ、タテハケで調整される。色調は明橙色。残高は11.1cm、復元底径7.3cmを有する。43は底部に穿孔されている甕で、内面は黒褐色、外面は明茶褐色で内面は濃いススが付着する。外面はハケメで調整後、ナデ消される。底部に穿孔されていると考えられる孔があるが、打痕がない為に底部穿孔土器の可能性は低い。44は底部に焼成後穿孔を持った甕で、外→内にかけて剥離しており、外面には打痕がある。復元孔径は2.4cm。80は復元胴部径47.4cmの大型の甕で、一条突帯を３条巡らす。外面に一次焼成による被熱痕があり、橙褐色を帯びる。摩滅、表面風化が著しい。81は復元胴部径48.4cmの大型甕で、二重M字突帯が一周巡らす。突帯下部には黒斑があり、ススが付着する。82は口縁のみ残る大型甕で表面風化が著しい。復元口径53.2cm。84は弥生前期の甕で、復元径51.6cm。色調は明橙色で焼成は良好だが表面風化のため、調整不明瞭。

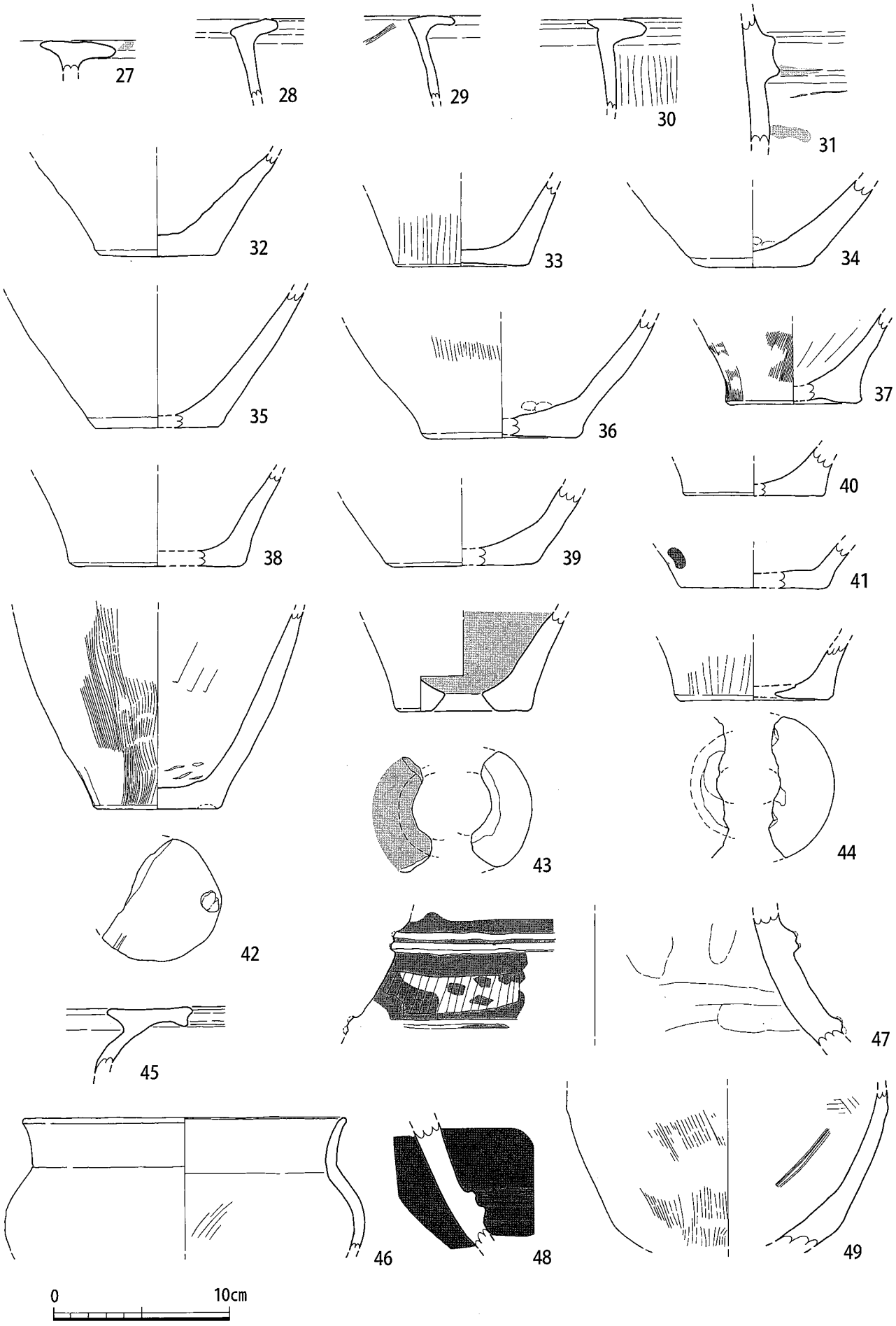
壷（７、45～54、62、79、83）７は弥生中期中葉の壷で、口縁と胴部の接合痕が残る。ナデ調整された後、外面にタテハケが施される。胎土が粗く、１～２mm程度の石英をやや多く含む。45は弥生中期中葉のM字口縁を持つ壷で、口縁上部に一次焼成痕がある。内面はナデ、外面はヘラナデ・ヨコナデで調整される。46は丹塗磨研土器の樽型壷で、M字突帯文を２条巡らす。内面はナデられており、外面は暗文が施される。胎土も非常に細砂粒である。47は土師器の壷で頸部から口縁部にかけてやや外傾する。復元頸部径は17cm、復元口径18.2cm。48は弥生中期の大型壷で、肩部のみが残存する。全体がコゲていて強度の熱を受けており、もろく崩れやすい。胎土も粗い。M字突帯文を巡らす。49は歪な形状の丸底壷で、底部が剥落して摩滅・破損が著しい。内面に数箇所棒状工具痕が残り、わずかにハケメが残る。外面はタテハケで調整されている。50は胴肩部分に刻目文突帯を持つ土師器の壷で、内面はハケメを残すが外面は摩滅により調整不明瞭である。51は３C後半の布留式壷で、口縁部を中心にヘラケズリされ、胴部にハケメを残す。外面に黒斑が付着する。52は弥生後期後葉の二重口縁壷で、摩滅が著しいが、内面にわずかにヨコナデされる。焼成は良好で、胎土は粗い。53は弥生中期中葉の広口口縁壷で、摩滅により調整不明瞭であるが、外面に



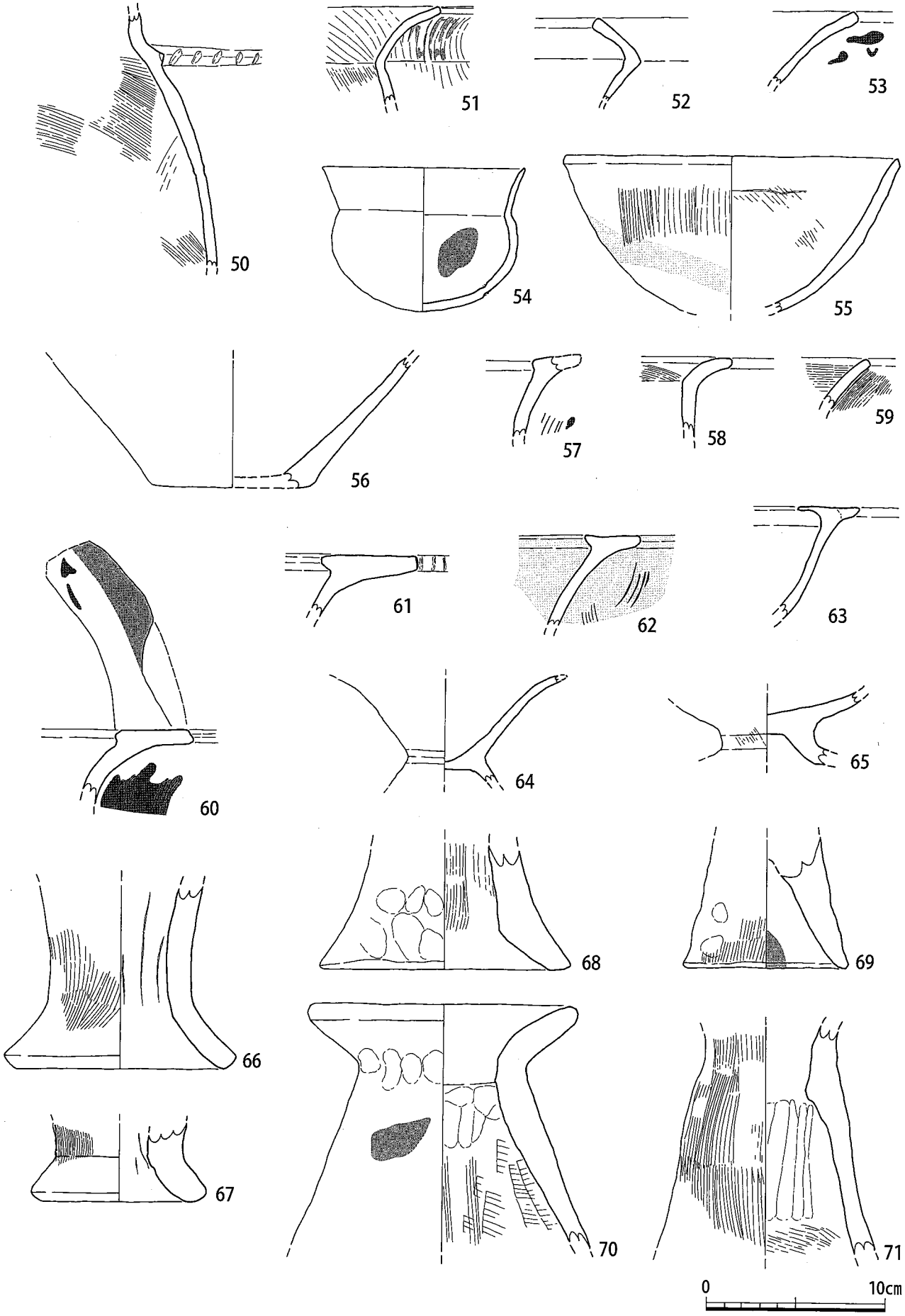
第14図　土器溜まり実測図（1/15）



第15図　土器溜まり出土遺物実測図１（1/3、●は1/4）



第16図　土器溜まり出土遺物実測図２（1/3）



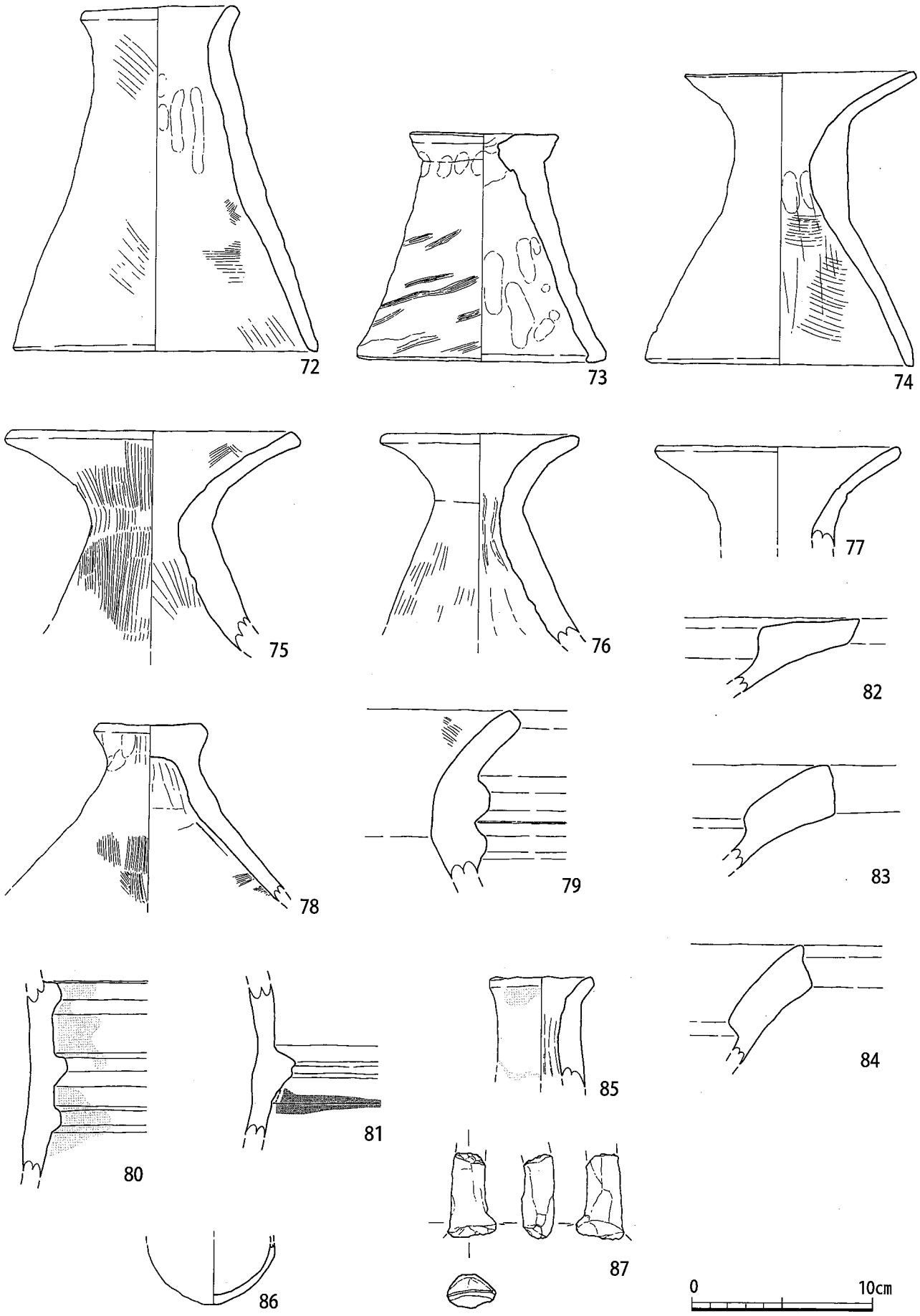
第17図　土器溜まり出土遺物実測図３（1/3）

斑点状に朱が付着する。54は布留式退化期の小型丸底壷で、４Ｃ中頃に属する。器高8.1cm・口縁径11.2cmのほぼ完形で残存する。内部にはススが付着し、焼成は良好であるがもろく壊れやすい。62は弥生中期中葉の壷で、外面に工具痕が残るが、２次焼成によって調整は残っていない。全面が暗黒茶色にコゲている。79は弥生後期中葉の大型壷で風化によって調整が不明瞭であるが、二条突帯文の中央にヘラ状工具痕によるナデがある。復元口径30.6cm。83は濃橙褐色の大型壷で、内面にややナデ痕を残すが、ほとんどが摩滅している。

鉢（７、41、55～59）７は底部が丸底の土師器の鉢で、焼成がやや不良、軟質である。内面淡赤黄色、外面淡黒黄色でススが付着する。タテハケで調整され、底部から胴部にかけて1/3残存する。41は外面に丹塗りが施された鉢で、底部に黒斑が残る。内外ともナデ調整される。55は４Ｃ中頃の土師器の鉢で、外面に横方向に延びる被熱痕が残る。復元口径18.8cm。56は表面風化が著しい鉢で、胴部を1/6残存する。胎土は細かく、１～２mmの白色長石・石英を含む。57は弥生中期中葉の鉢で、外面に丹塗り、暗文が施される。胎土は非常に精良で細かい。58は弥生後期後葉の鉢でナデ調整され、内面の口縁部にハケメが残る。胎土はやや細かく、１mm以下の白色長石・石英を含む。59は内面にヨコハケ、外面にタテハケを有する鉢で、口縁部約1/13を残存する。

高坏（16、60、61、63～65）16は弥生中期中葉の高坏で内面に丹塗りが残る。口縁部1/16残存。60は弥生中期中葉の外面丹塗りが部分的に残る高坏で、口縁部1/8を残存する。内面摩滅、外面にヘラミガキをおこない、口縁上部に棒状工具痕・黒斑（２次焼成痕）が残る。61は弥生後期前葉の高坏で、ナデ成形後、口縁に刻み目を施す。内外ともに淡黄橙色。63は弥生中期中葉の高坏で、胴部が上に立ち上がる。口縁部1/5を残存し、明橙色で焼成はやや良好だがややもろい。64は4C中頃の土師器の高坏で、表面風化によって調整は不明瞭である。頸部・坏胴部を約1/8残存する。65は頸部のみを残存する高坏で、ユビオサエで脚部と坏部を接合する。頸部外面は接合後、ナデ消され、タテハケで調整される。

器台（66～77）66は弥生後期終末期の器台で、全体をヨコナデで成形後、外面はタテハケで調整される。内面にはシボリ痕が観察できる。胴下半部1/2残存。67は弥生後期終末期の器台で、底部を1/4残存する。外面には指頭痕がありナデオサエされ、内面はタテハケが観察できる。色調は明橙色で焼成は良好である。68は古墳時代前期の土師器の器台で内外とも淡赤褐色である。外面はユビオサエで成形後タテハケで調整し、内面はナデられる。また内面下位に黒斑がやや付着する。69は古墳時代前期の土師器の器台で、内面に黒斑が残る。内面はナデ、外面はタテハケ・ユビオサエで成形される。底部1/2残存。70は上半部が短く下半部が長い器台で、調整がはっきりと残る。外面は頸部に指頭痕が残り、ユビオサエによって接合され、全体をナデている。内面はタテハケ、指頭痕が見られ、下半部には横方向にヘラオサエされた跡が残る。71は形がいびつで上半部が急激に立ち上がる器台で、頂部・底部を欠損する。外面にタテハケを有し、内面はナデ・オサエで調整され、下部に横方向のハケメが残る。内面灰褐色、外面黄灰色で胎土は粗い。72は器高20cm、頂部径8.7cm、底径16.7cmの頸部の曲がりが緩やかな器台で、内面シボリ・ユビオサエで調整、外面はナデ後、斜め方向のハケメが薄く残存する。73はオサエによって成形された器台で、全面に指頭痕が残る。口縁が短く、器高12.7cmに対し約1.5cmしかない。外面胴下部には斜め方向に棒状工具によるナデられた跡がある。74は頸部が長く細い器台で、ほぼ完形で残存する。内面は指頭痕・ハケメ・シボリが観察できるが、外面は摩滅しており調整不明瞭である。シボリには指と棒状工具が使



第18図　土器溜まり出土遺物実測図４（1/3）

用される。75は口縁が大きく広がる興奮時代初頭の器台。外面に強いタテハケが残り、内面はナデ・ハケメで調整される。底部は欠損。76は頸部が細く絞まっている器台で、内面はシボリ・ユビオサエで調整される。外面はタテハケが施されるが、風化のためはっきりと残っていない。77は頸部から下を欠損する器台で、調整は不明瞭、焼成はやや不良で残存状況は良くない。

蓋（78）78は弥生中期初頭の蓋で頂部はナデで調整され、身との接合にはユビオサエ後、ヘラナデされている。内面は棒状工具痕、ハケメが残る。シボリ部分はヘラ状工具でナデられる。底部欠損。

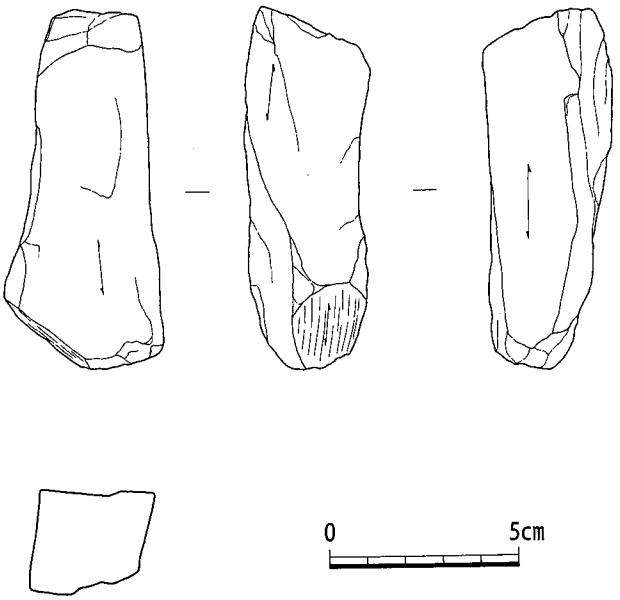
鞴（85）85は上部のみ残存する鞴で、外面に強い被熱痕が残る。

ミニチュア土器（86）86は復元胴部径７cmのミニチュア土器で、調整は摩滅により不明瞭である。

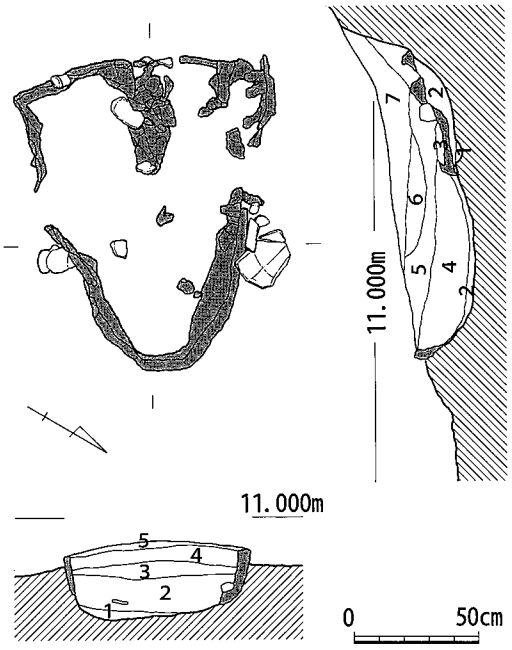
不明土製品（87）87は淡褐色の不明土製品で、手づくね成形される。両端が欠損する。

土器溜まり出土石器

砥石　長さ9.6cm、幅4.1cm、厚さ2.8cm。砥面は３面あり、一部は面が粗い。



第19図　土器溜まり出土石器実測図（1/2）



第20図　焼土坑実測図（1/30）

1．黄灰色粘質土（SD-01）　2．灰褐色粘質土
3．黒褐色粘質土（一次炭化層）
4．黒褐色粘質土（一次炭化層）
5．明黄褐色粘質土（鉄滓出土）
6．黒色粘質土（二次炭化層）
7．流下土層（Ⅱ区土層９と同一）

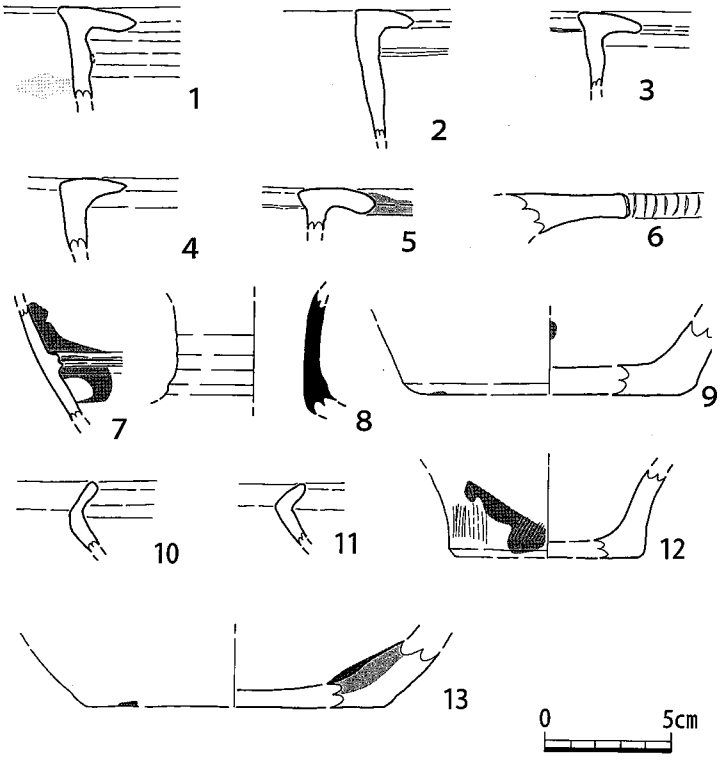
焼土坑（第20図）

Ⅱ区調査区の中央付近で検出された焼土坑は、土器溜まりに切り込んだ形で出土した。周囲を覆う壁は赤く焼けており、硬く締まっていた。壁土には少量の土器が含まれており、弥生中期中葉から古墳前期のものまでが含まれる。また、土坑内部は４層に分かれており、最下部の第１層は灰褐色粘質土、少量の土器片が含まれる。第２層は粗めの木炭が主要の炭化層で、黒色粘質土。少量の土器片と第23図の鉄滓が出土した。第３層は黒褐色粘質土で少量の土器を含む。第４層はやや粗めの炭化層で黒色粘質土、少量の土器片を含んでいる。この上には包含層３が流れ込むように層を成している。これらの出土土器は、弥生中期中葉から古墳時代のものまで含まれ、壁体の時期と一致

することがわかった。

焼土坑出土遺物（第21図）

甕（1～6、9～12）1は口縁がやや外側に垂れるT時の鋤先口縁を持つ甕で、全体をナデで調整する。内面に二次焼成痕がある。焼土壁出土。2は内面が真っ直ぐに立ち上がる口縁の甕で、外面胴部に棒状工具痕が一周する。焼土壁出土。表面風化が激しく、外面は一部剥離する。3はやや垂れた口縁を持つ甕で、内面接合部に棒状工具痕が残る。外面はヨコナデ、内面ナデで調整する。4は摩滅が著しい甕で、外面にナデ調整がやや残るがほとんどが不明瞭である。口縁部1/10残存する。焼土壁出土。5は焼土坑内第2層出土の甕で口縁部先端に黒斑が残る。内外ともナデ調整する。6は焼土坑出土の甕で、口縁のみが残存する。口縁部先端に刻目を施す。9は底部残存の著しい摩滅を受けた甕で、内面胴部・外面底部にススが付着する。10は焼成がやや不良の口縁部残存の甕で、胎土がやや粗く、1～2㎜程度の白色長石、1㎜程度の黒色長石、2㎜程度の石英をやや多く含む。11は焼土壁出土の復元口径12cmの甕で、口縁部のみ残存するが摩滅が激しく摩滅する。焼土壁出土。12は底部の立ち上がりが急な甕で、外面に黒斑が残る。胴部にはタテハケ、底部にはヘラナデを施す。焼土壁出土。



第21図　焼土坑・焼土壁出土遺物実測図（1/3）

壷（7）7は弥生中期後葉の壷で、外面に丹塗りが施される。M字突帯を一条巡らす。

不明土器（8）8は焼土坑出土の須恵器の破片で、残存が少なく器種不明である。内外とも回転ナデで調整する。

鉢（13）13は底部が平らで立ち上がりが緩やかな鉢で、外面の一部、特に内面はコゲが著しい。焼土壁出土。

焼土坑出土石器（第22図）

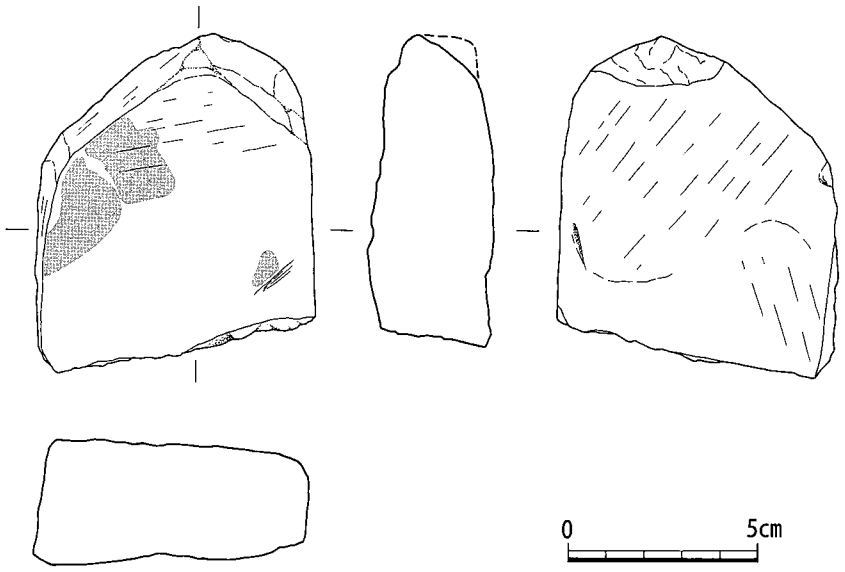
砥石　長さ7.9cm、幅8cm、厚さ3.3cm。4面に砥面があり、一部ススが付着する。

焼土坑出土鉄滓（第23図）

鉄滓　長さ8.6cm、幅4.4cm、厚さ4.3cm。第2層出土。

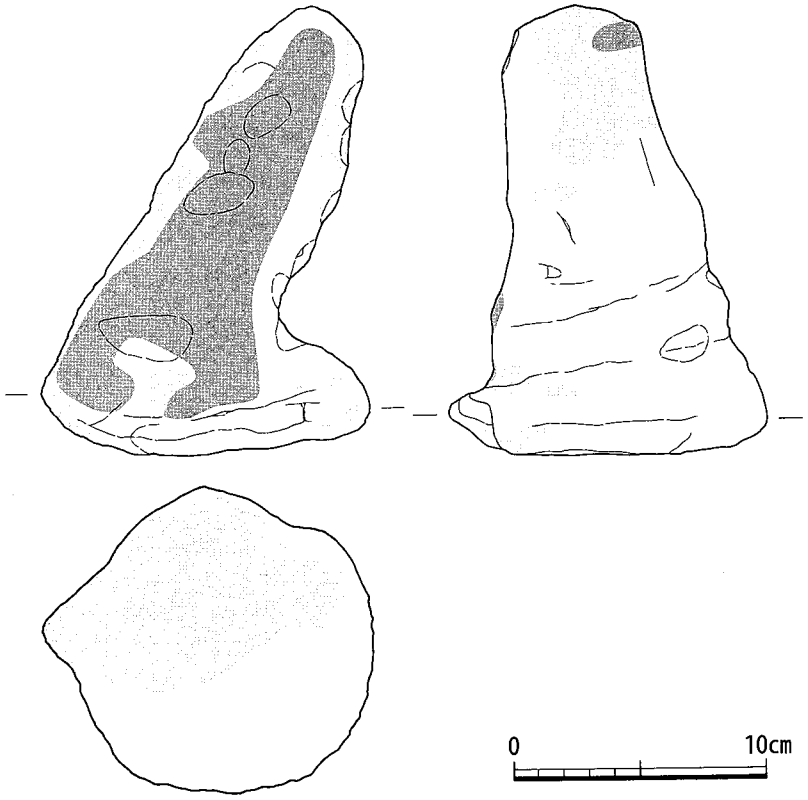
SD-01（土器溜まり下溝状遺構：第25図）

SD-01は土器溜まりを切るかたちで検出した。幅約15～30cm、深さ約７～20cmの溝状遺構で、北から南東へ流れる。また、溝内から出土した支脚は片面のみに強度の熱を受けており、焼土坑との関連性を持っていると考えられる。

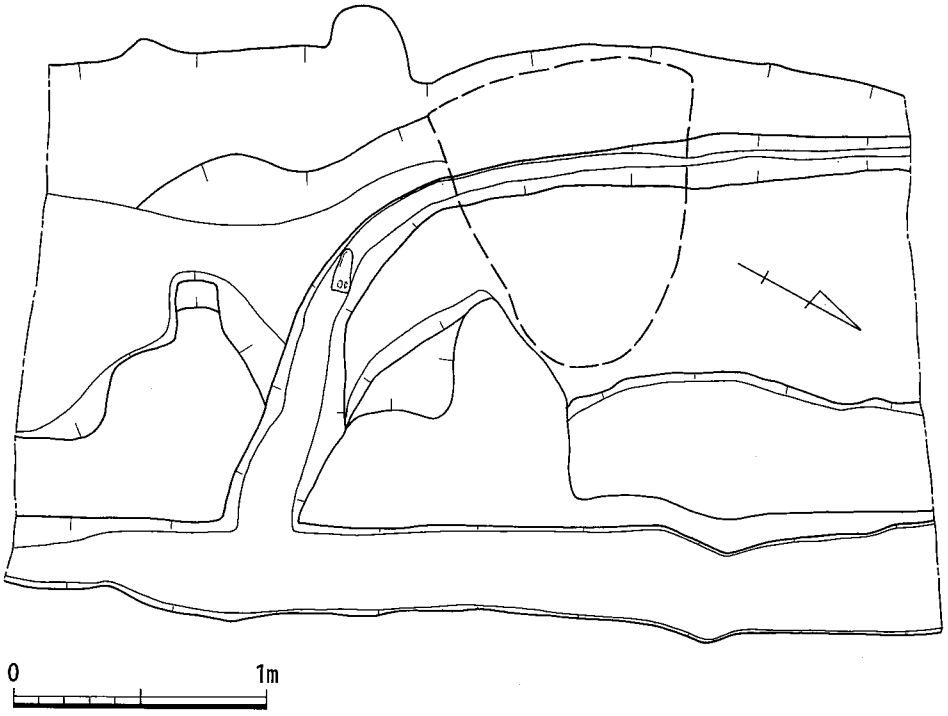


第22図　焼土坑出土石器実測図（1/2）

第23図　焼土坑出土鉄滓実測図（1/2）



第24図　SD-01出土支脚実測図（1/3）



第25図　SD-01実測図（1/30）

出土遺物（第24図）

SD-01出土の支脚は前面ナデとオサエで成形され、背部のつまみを下方に持つ。片面のみに被熱痕・コゲが残る。

出土遺物（第27図）

甕（１～３）１は内面赤褐色、外面黄褐色にかなり強い二次焼成を受けた甕で、口縁がやや垂れるＴ字の鋤先口縁を持つ。胎土はやや粗く、２mm程度の白色長石・石英を含む。２はやや垂れた口縁を持つ甕で、上部にススが付着する。口縁上部をナデられるが、焼成があまく、摩滅・剥離で調整は不明瞭である。３は底部が平らで復元底径7.1cmの甕である。底部1/3残存し、焼成がやや不良、胎土も粗く、状態が非常に悪い。

壷（４）４は復元口径40.6cmの大型の壷で、外面に棒状工具による刺突痕が下方向に向かって複数残る。

高坏（５）５は頸部のみ残存する高坏で、表面風化が進んでいるが内面にユビオサエによる指頭痕が残る。

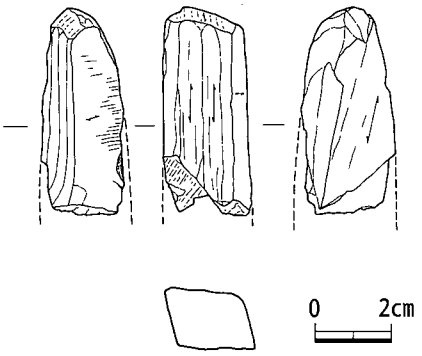
器台（６）６は弥生後期終末期の器台で、全面が暗赤褐色で頸部には指頭痕が残るが摩滅しており、調整は不明瞭である。底部欠損。

SD-01出土石器（第26図）

砥石　長さ5.5cm、幅2.2cm、厚さ1.6cm。砥面は４面あり、棒状のものを研いだ痕跡が２本存在する。一部欠損。

包含層

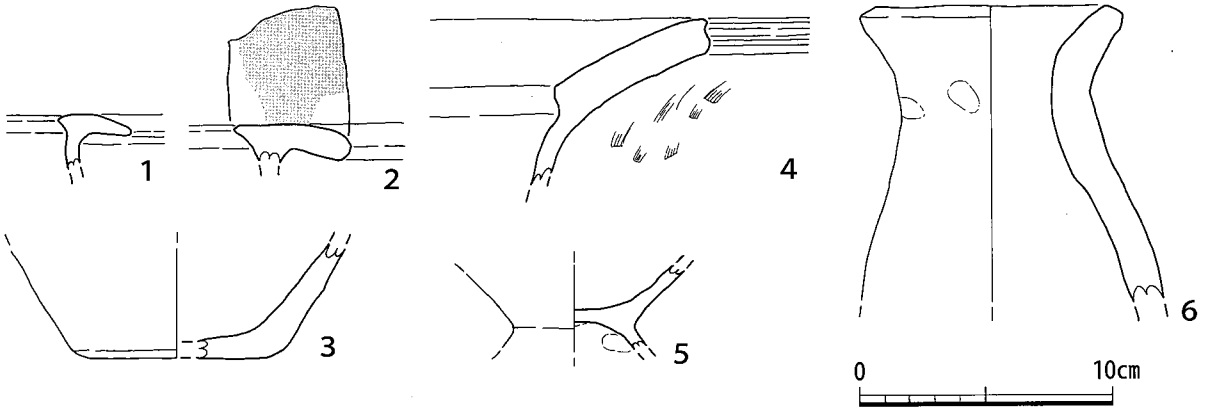
Ⅱ区での包含層は、第３層から第７層までを確認できた。特に第３層は弥生中期土器から黒色土器を大量に含んでおり、第４層は弥生中期土器～黒色土器、龍泉窯系青磁を含む。第５層～７層は須恵器、瓦質土器、青磁、白磁などの中世の遺物を多く含む。いずれも土中から遺構を伴わずに出土した。また、遺物のほとんどが摩滅・風化して完形で出土する土器はごく稀であることから第３層から７層は流下土の可能性が高い。



第26図　SD-01出土石器実測図（1/2）

出土遺物（第28・29図）

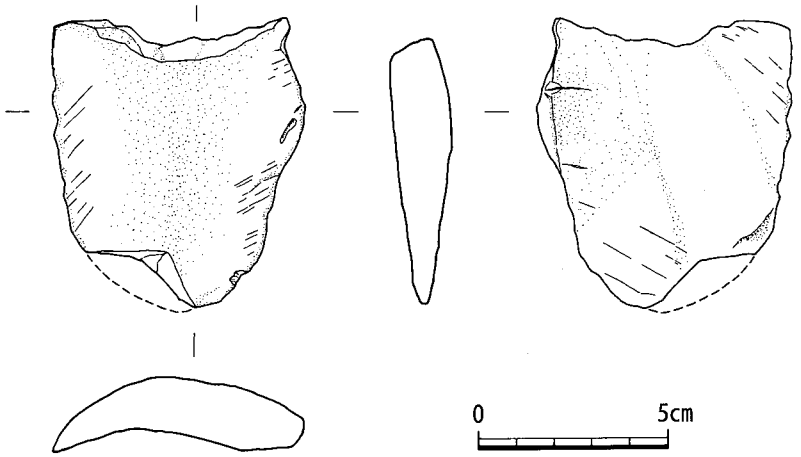
壷（４）４は外面に丹塗りが施された壷で、胴部の破片のみ残存する。胎土は微細であるが、摩滅のため調整不明瞭。第３層出土。



第27図　SD-01出土遺物実測図（1/3）

碗（１、５、６）１は第３層上面出土の高台付碗で、底部のみを残存する。底径5.8cm、残高2.7cmを有する。５は第４層出土の青磁碗で、台部1/5を残存する。台部復元径5.4cm、内外面を回転ナデで調整する。６は第６層出土の白磁碗で、内面が濃灰白色、外面は黄白色。内外とも回転ナデで調整する。

皿（３）３は第６層出土の土師皿で、内面にナデ、外面にハケメ・ナ



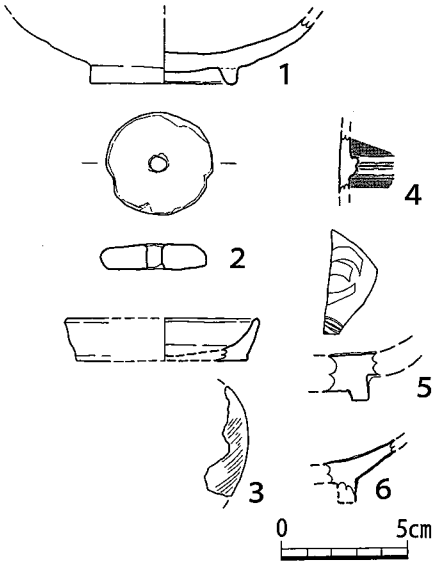
第28図　Ⅱ区第３層（包含層）出土石器実測図（1/2）

デ？を残す。内外ともに淡橙褐色で、約1/7を残存する。

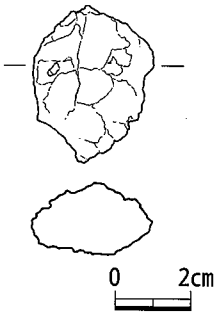
紡錘車（２）２は第３層出土の紡錘車で、直径4.3cm、厚さ１cm、孔径0.6cmの完形品である。手づくね成形されるが、表面は摩滅している。

第３層出土鉄滓（第30・31図）

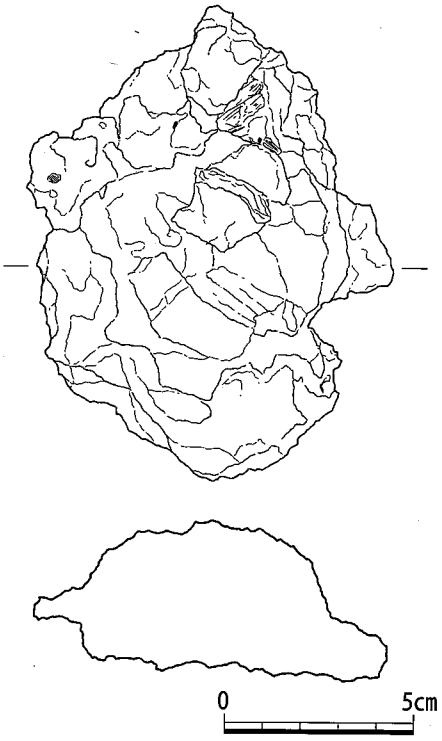
１の鉄滓は長さ4.2cm、幅3.2cm、厚さ1.9cmで、重量は24.34g。第３層出土。２は長さ12.5cm、幅9.4cm、厚さ4.3cmで重量484.14g。他に出土したものよりも大きめで木質をやや含有する。



第29図　Ⅱ区第3、4、6層（包含層）出土遺物実測図（1/3）



第30図　Ⅱ区第３層（包含層）出土鉄滓１（1/2）



第31図　Ⅱ区第３層（包含層）出土鉄滓２（1/2）

第４章　おわりに

今回報告を行ったＩ区とⅡ区をそれぞれの遺構の時期や性格などについてを述べ、まとめとしたい。

Ｉ区の調査

方形土坑（SK-01）　SK-01は中世によくみられる土壙墓と似た型式をもっている。本来はかなりの深さを持っていたであろうが、削平によって床面のみが残存する。また、出土した白磁は中世に流通していた貿易陶磁で時期は1250～1330年頃でⅨ類にあたる。

Ⅱ区の調査

土器溜まり　Ⅱ区中央よりのやや東側で検出した、弥生中期中葉～古墳前期頃の土器を大量に含む流れこみの土器溜まりである。そのほとんどが接合不可能でローリングによる摩滅が著しい。傾斜が上がるほど時期の新しい土器が含まれる。

焼土坑　第３層下の土器溜まりに切り込んで検出した焼土坑は、強度の被熱を受けた壁面を持っており、高いところで約15cmを有する。形状は逆台形の無花果型で４層に分かれており、下にいくほど炭の密度が高い。窯跡研究会編の「古代の土師器生産と焼成遺構」に記載されているＡ類焼成坑のＩ類-a類に形状が酷似するが、鉄滓や白色粘土の出土があることや、隣接する元岡桑原遺跡からは奈良時代の製鉄遺構が多数出土していることから後者のほうが可能性としては強い。含まれる土器の時期は土器溜まりのものとほぼ同じである。

SD-01　土器溜まりを南北に切るかたちで検出したSD-01は約15～20cmの幅をもっており、焼土坑の南側からは片面のみがコゲ・被熱痕をもった北部九州で比較的よく見る形状の土製支脚が出土。一般的には背上部につまみを持つが、SD-01出土の支脚は背部のつまみが下方についている特徴を持つ。

【参考文献】

・窯跡研究会編　「古代の土師器生産と焼成遺構」　真陽社
・中世土器研究会編　「概説　中世の土器・陶磁器」　真陽社
・岡部裕俊編　「泊桂木遺跡」前原市文化財発掘調査報告書　第64集　1996年
・木下博文著　「元岡桑原遺跡第42次調査について」　福岡市教育委員会

図　版

１－１　Ⅰ・Ⅱ区全体写真（真上から）

１－２　Ⅰ区部分全体写真（真上から）

１－３　Ⅱ区部分全体写真（真上から）

図版　2

２－１　Ⅰ区北側壁土層断面状況（南東から）

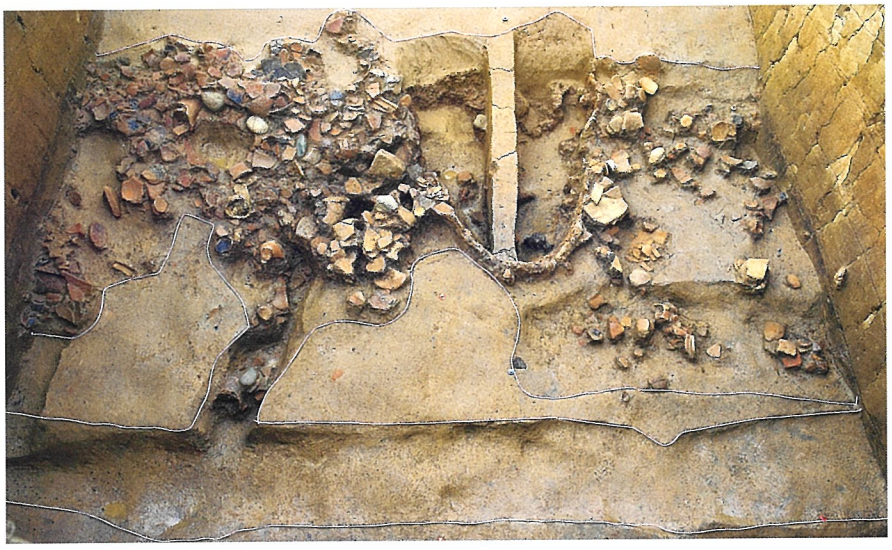
２－２　Ⅱ区北側壁土層断面状況（南西から）

３－１　Ⅰ区下層遺構面部分全体写真（西から）

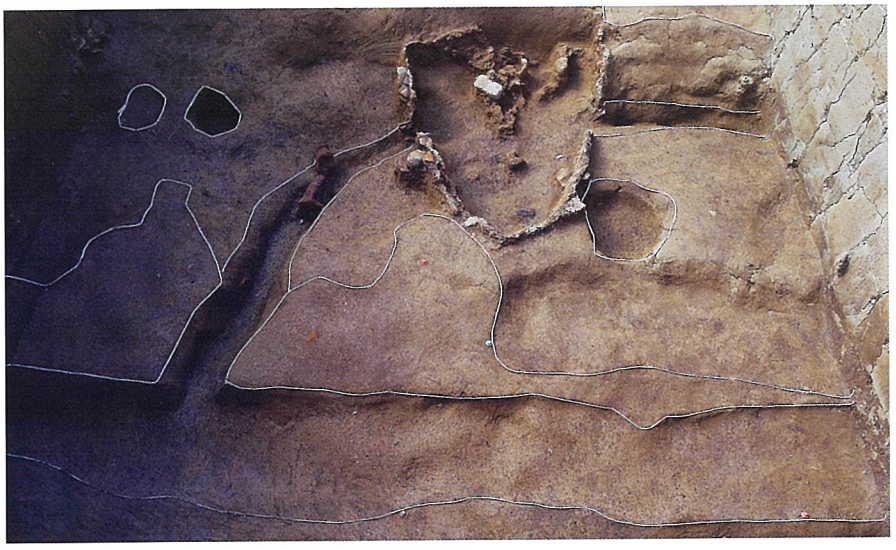
３－２　Ⅰ区中世遺構面部分全体写真（南西から）

３－３　Ⅰ区方形土坑白磁出土状況近景（南西から）

４－１　Ⅱ区土器溜まり、焼土坑出土状況①（東から）



４－２　Ⅱ区土器溜まり、焼土坑出土状況②（東から）



４－３　Ⅱ区土器溜まり、焼土坑出土状況③（東から）

５－１　Ⅱ区焼土坑完掘状況近景（東から）

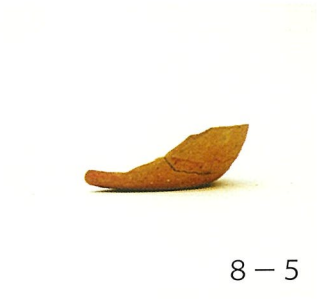
５－２　Ⅱ区焼土坑土層断面状況（南東から）

8－1

8－2

8－3

8－4


8－5

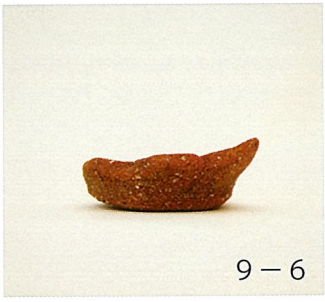
9－1

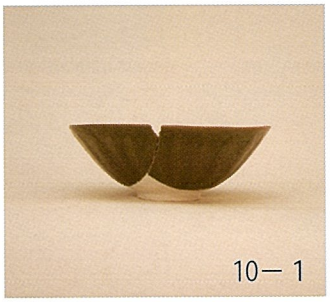
9－2

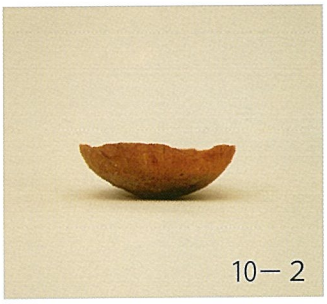
9－3

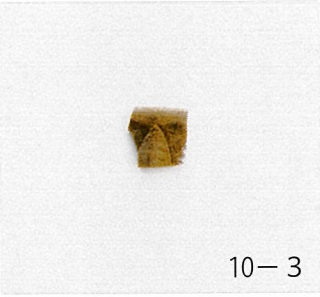
9－4

9－5

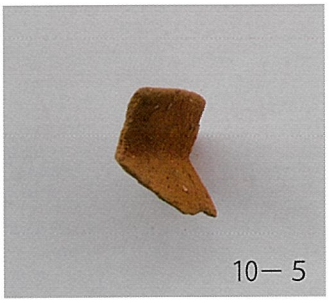

9－6

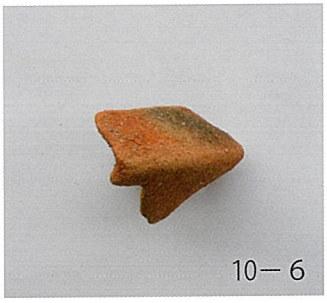

10－1

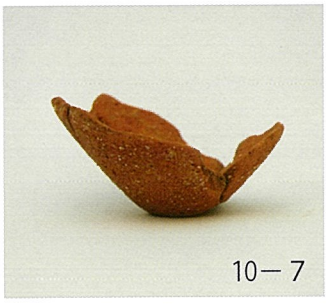

10－2


10－3

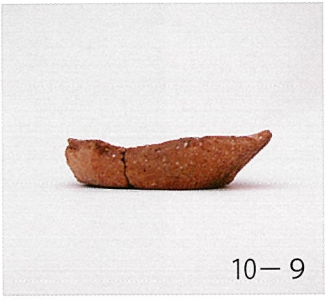
10－4


10－5

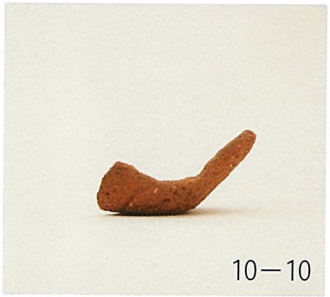

10－6

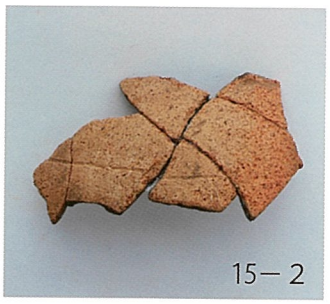

10－7

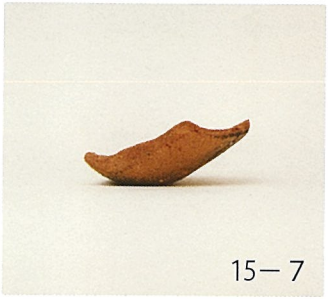
10－8


10－9

Ⅰ区出土遺物①







Ⅰ区出土遺物②、Ⅱ区出土遺物①

15－21

15－22

15－23

15－24

15－25

15－26

16－27

16－28

16－29

16－30

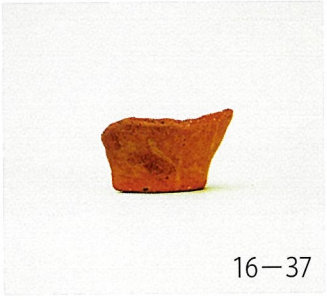
16－31

16－32

16－33

16－34

16－36


16－37

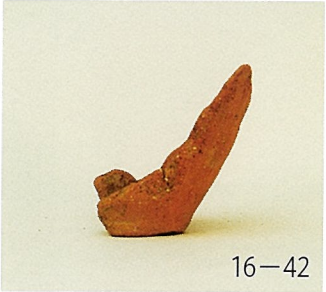
16－38

16－39

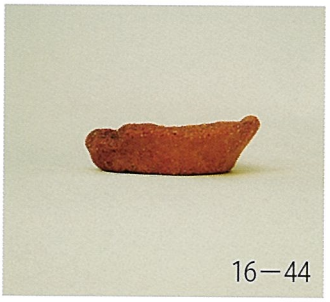
16－40

16－41

Ⅱ区出土遺物②


16－42

16－43


16－44

16－45

16－46

16－47

16－48

16－49

17－50

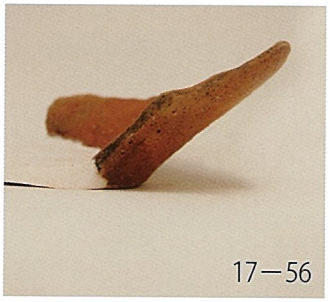
17－51

17－52

17－53

17－54

17－55


17－56

17－57

17－58

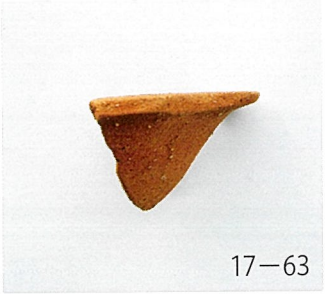
17－59

17－60

17－61

Ⅱ区出土遺物③

17－62


17－63

17－64

17－65

17－66

17－67

17－68

17－69

17－70

17－71

18－72

18－73

18－74

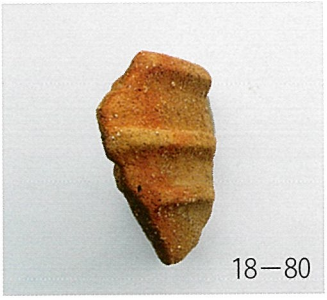
18－75

18－76

18－77

18－78

18－79


18－80

18－81

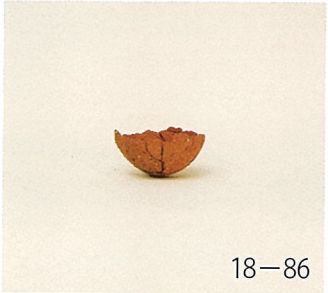
Ⅱ区出土遺物④

18－82

18－83

18－84

18－85

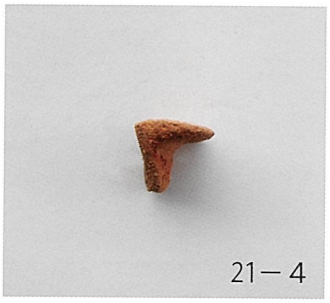

18－86

18－87

21－1

21－2

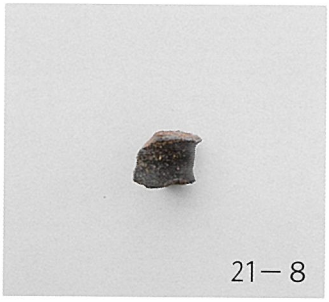
21－3


21－4

21－5

21－6

21－7


21－8

21－9

21－10

21－11

21－12

21－13

24

Ⅱ区出土遺物⑤

27－1
27－2
27－3
27－4
27－5
27－6
29－1
29－2
29－3
29－4
29－5
29－6
11
19
28
22
23
26
30
31

Ⅱ区出土遺物⑥

報告書抄録

ふりがな	とまり　かつらぎいせき　に
書名	泊桂木遺跡Ⅱ
副書名	県道福岡志摩線の道路拡幅工事に係る発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	前原市文化財調査報告書
シリーズ番号	第98集
著書名	福田博右
編集機関	前原市教育委員会
所在地	〒819-1192　福岡県前原市前原西一丁目８番14号
発行年月日	西暦2008年３月31日
保管場所	〔写真〕〔図版〕〔遺物〕　前原市教育委員会
保管場所所在地	福岡県前原市前原西一丁目８番14号

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
泊桂木遺跡 第２次調査地点	福岡県前原市 大字泊字桂木	40222		33°34'53" ~56"	130°13'03" ~06"	2007. 1～ 2007. 3	35㎡	道路拡幅工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	突起事項
泊桂木遺跡 第２次調査地点	集落、 墓地、 生産遺跡	弥生時代中期、 終末期～古墳時代初頭、中世	土坑墓、焼成遺構、溝状遺構	弥生土器、甕棺、土製紡錘車、須恵器、土師器、白磁、青磁、支脚、鉄滓、石斧	

泊桂木遺跡Ⅱ

福岡県前原市大字泊字桂木所在遺跡の調査報告書
前原市埋蔵文化財調査報告書　第98集

2008年３月31日

発　行　前原市教育委員会
福岡県前原市前原西１丁目８番14号
TEL　092－323－1111

印　刷　㈱津村愛文堂
福岡市早良区室見２丁目16－８
TEL　092－821－0173　　FAX　092－831－3329